東京大学広報誌
The University of Tokyo Magazine

淡青
tansei

44
2022/03

［巻頭座談会］
UTokyo Compassが拓く大学の新世界

［第一特集］
映画研究から淡青色の監督インタビュー、
研究者のお薦め作品集まで、
「大学×シネマ」の成果を投影する21ページ
UTokyo映画祭2022

［アラムナイ通信］
東京大学校友会ニュース

The University of Tokyo Magazine
淡青
tansei
東京大学広報誌
44
2022/03

今号の表紙は駒場の900番教室（講堂）。内田祥三と清水幸重が設計し1938年に竣工した建物です。数々の授業や講演が行われてきましたが、なかでも1969年に行われた三島由紀夫と東大全共闘の熱い討論会は語り草に。コロナ禍以降は学生がオンライン授業を受講するスペースとしても活用されています。

「淡青」について
東京大学と京都大学（当時は東京帝国大学、京都帝国大学）が1920年に最初の対校レガッタを瀬田川で行なった際、抽選によって決まった色が「淡青」（ライトブルー）でした。本学運動会応援部の旗をはじめとして、スクールカラーとして定着しています。

コロナ禍になって３年目に入りました。第６波のオミクロン株が猛威を振るう中、学内ではZoomを用いた藤井輝夫総長と構成員の対話活動が、これまでに20回近く行われています。特にコロナに関する対話活動は、異なる状況下にある国内外の学生たちが総長と困難を共有し、対話を通じて未来を模索する印象的な回でした。今号冒頭の座談会では、こうした対話を重視する総長のビジョン“UTokyo Compass”のコンセプトが語られています。また映画特集では多くの方に協力をいただきました。あちこちに蓮實重彦先生の名が出てきます。もちろん、長年にわたって東大の映画研究を牽引し、第26代総長の重責も担われた先生です。蓮實先生に続く東大の映画魂をお楽しみください。

東京大学広報室長　横山広美

編集発行／東京大学広報室
広報誌部会／
横山広美（広報室長　カブリ数物連携宇宙研究機構教授）
杉山清彦（広報室副室長　総合文化研究科准教授）
谷口将紀（法学政治学研究科教授）
大杉美穂（総合文化研究科教授）
渡部雅浩（大気海洋研究所教授）
高井次郎、小竹朝子、ウィットニー・マッシューズ、青木瑞穂（広報課）
梶野久美子、福味和子（卒業生部門）

アートディレクション／細山田光宣（細山田デザイン）
デザイン／グスクマ・クリスチャン、鈴木沙季（細山田デザイン）
撮影／貝塚純一（p1,3-7,8-11,16-18,36）、長谷川博一（p31）

印刷／図書印刷
発行／令和４年３月14日

【淡青】お取り寄せ方法

テレメール
テレメールで【淡青】を取り寄せることができます。右のURLにアクセスして、資料請求番号をご入力ください。送料はご負担ください。

URL：http://telemail.jp
資料請求番号：707179
送料：180円（後納）

※本誌へのご意見・ご感想はkouhoukikaku.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jpまでお寄せください。

contents

p.03-07
［巻頭座談会］
UTokyo Compassが拓く大学の新世界
藤井輝夫×岩村水樹×今泉柔剛×佐藤健二

p.08-28
［特集］
UTokyo映画祭2022

p.08-11
オープニング対談
中田秀夫×竹峰義和

p.12-15
東大映画研究Now
マチュー・カペル、鄭 仁善、韓 燕麗、丹羽美之

p.16-20
淡青色の映画人
豊島圭介、後藤美波、小手川将ほか

p.21-28
研究者12人が学術の観点から薦める映画集
華井和代、木下正高、阿古智子、藤原帰一、大島まり、伊藤由佳理、佐倉 統、深野祐也、大栗博司、稲見昌彦、池田嘉郎、村上善則

p.29-30
［連載］
キャンパス散歩／柏Ⅱキャンパスの巻
UTokyo Topics

p.31-35
［アラムナイ通信］
東京大学校友会ニュース

［巻頭座談会］

総長×理事×執行役

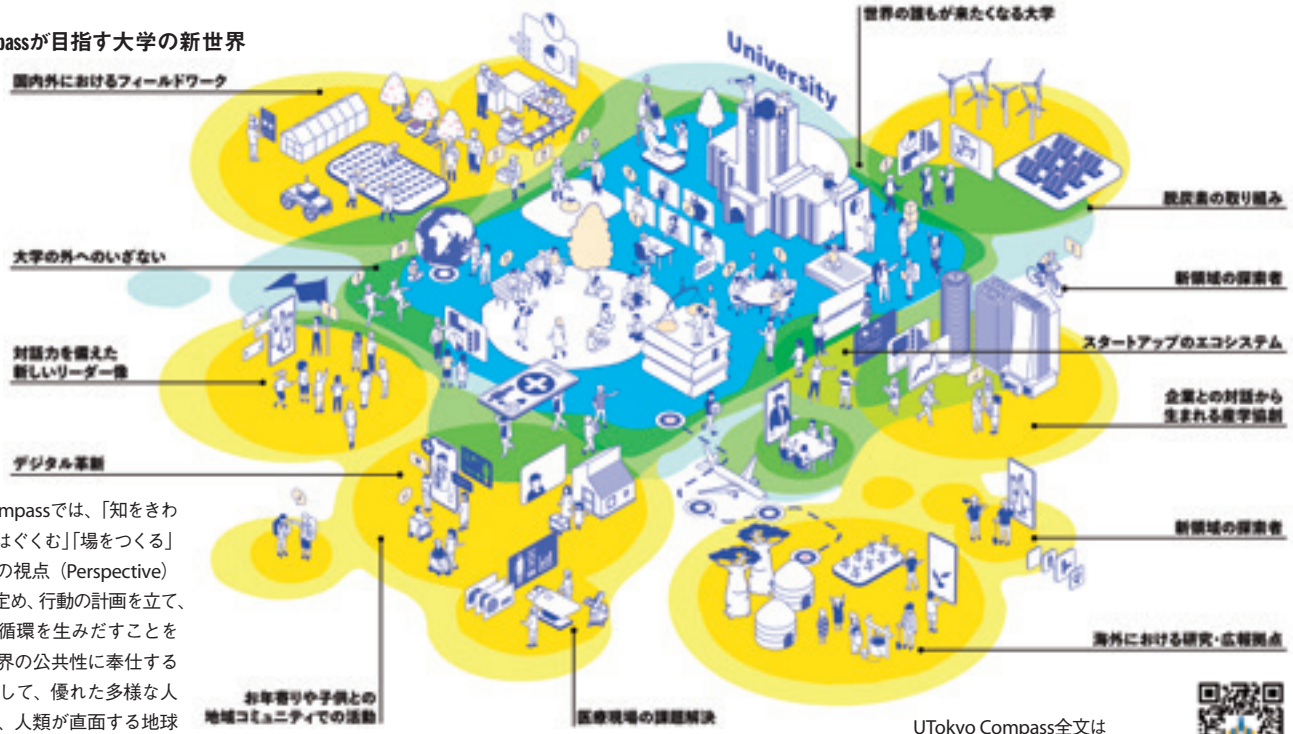
「UTokyo Compass」が拓く大学の新世界

藤井総長が昨秋公表した活動指針「UTokyo Compass」。
「多様性と包摂性」「対話」「誰もが来たくなる大学」といったキーワードが特徴的なこの指針について、
起草に携わった4人が本郷の図書館に集まり、構想の背景、強調したかったこと、
目指すべき姿、大学改革の現況、今後の展望などを語り合いました。
東京では珍しい大雪のなかで行われた座談会から大学の未来の姿が見えてきます。

多様性の海へ：対話が創造する未来

Into a Sea of Diversity: Creating the Future through Dialogue

UTokyo Compassが目指す大学の新世界



UTokyo Compassでは、「知をきわめる」「人をはぐくむ」「場をつくる」という３つの視点（Perspective）から目標を定め、行動の計画を立て、それらに好循環を生みだすことを通じて、世界の公共性に奉仕する総合大学として、優れた多様な人材の輩出と、人類が直面する地球規模の課題解決に取り組むことを掲げています。

UTokyo Compass全文は
こちらからご覧ください

学外の皆さんとともに考えともに活動する大学として

佐藤　まずはUTokyo Compass策定の経緯について、藤井総長からご紹介いただけますか。

藤井　総長就任にあたり、さまざまな地球規模の課題が露わになったいまの世界の状況を踏まえ、これからの大学はどうあるべきなのかを考えました。そこで思ったのは、大学だけでというのではなく、学外の皆さんとともに活動するのが重要だということです。学知を築く研究、人を育てる教育、産学協創や社会連携の活動も、大学の中と外に分けて考えずに進めたい。そのためには学内外での対話やダイバーシティ＆インクルージョン（D&I）の推進が必要であり、大学を世界の誰もが来たいと思える場にすることが重要です。そうした大きな方向性のもとで大学全体のビジョンをまとめようと全学で検討を積み重ね、 昨年９月にUTokyo Compassとして発表しました。

佐藤　岩村理事は学外から執行部に入られました。就任に際して考えていたことなど教えてください。

岩村　藤井先生が総長になる前にお話しする機会がありました。そのときに「対話」「共感」「世界の誰もが来たくなる大学」といったキーワードを聞いて、自分が大事にしてきた価値観に合致し、自分の経験を活かせる可能性があると思いました。私のバックグラウンドであるマーケティングの基本的な考え方は“Connect users with the magic.”です。ユーザーとの対話を通じて理解と共感を醸成しブランドとの結びつきを構築するということですが、これはまさに、対話を通じて大学が社会と結びつくという総長の思いに近いことです。また、「誰もが来たくなる」はD&Iの文脈にあります。グローバル企業で働いてきてD&Iこそが新しいものを生むという認識を持っていたので、それを東大で進める姿勢に共感を覚えました。理事就任が決まった際に周囲から言われたのは「東大を変えることは日本を変えること」という話でした。グローバルな環境に身を置いていると、日本が世界から取り残される危機感を覚えます。東大を起点に日本が変わり、日本と東大が世界に貢献するという話に共感を覚え、ともにその任を担いたいと思ったのです。

佐藤　今泉理事は文部科学省から執行部に入り、事務全体を統括する立場からUTokyo Compass作成に関わりました。

今泉　理事に就任した2021年７月は策定の終盤のタイミングでした。これまで高等教育行政を担ってきましたが、「東大はここまで来ているのか」というのが最初に感じた驚きでした。東大は敷居が高いイメージが世間にはありますが、UTokyo Compassでは対話を通じて多様性と包摂性を高め、誰にも開かれた大学になることを目指している。エリートだけの閉じた場ではなく、自ら門戸を開いて、大学が社会のためにできることをやろうというメッセージに、大きな可能性を感じました。私の担当は事務組織と人事労務と法務とリスクマネジメントです。大学活動のメインである教育・研究を支える体制をどうよくするか、既存の役割に収まらず新しい役割を担って拡大する分野に事務はどう対応するか、それが私に課された任務です。大学が役割を拡大しようとすると、リスクは必ず生じます。それを早めに予測しなるべく最小限にするマネジメントが重要です。攻めと守りでいえば、攻めに移ろうとする東大の守

りの部分が私の仕事と考えています。その際、「守りのための守り」ではなく、「攻めのための守り」を心がけたいと思います。堅実に守る部分と柔軟に対応する部分のバランスが重要です。私の名は「柔剛」ですので、柔と剛をうまく織り交ぜていきたいと思います。

佐藤　私と藤井先生とのつきあいは濱田純一総長の「行動シナリオ」策定の頃からで、五神真総長の「東京大学ビジョン2020」作成でも同志として働きました。その縁もあってか、UTokyo Compass検討のタスクフォースを任されました。皆で議論を重ねるなかで「対話」「誰もが」の重視が、藤井総長のカラーになったと思います。学問は問いと答えで成り立ちますが、一人で問うて一人で答えるのではなく、ともに問うてともに答えることを提案したのが、一つの要点だと思います。これを学内外にどう伝えるかが今後問われるところです。さて、岩村理事は先に、東大は世間から受験の到達点と見られている、と話していましたね。そのイメージを変えるのに必要なことは何でしょう。

東大は受験の到達点だという世間のイメージを変えたい

岩村　東大の知名度は国内では問題なく、おそらくすべての人が名前は知っています。ただ、それに付随するイメージは受験の到達点というのがほとんどかもしれません。でも実際に東大に来れば、非常に豊かで多様な知と人が育まれているとわかります。その部分をしっかり発信することで、受験で終わるのではなく未来を作るための出発点であるというイメージ、学外の人も大学に来てともに何かを生み出すco-createの場であるというイメージに変えられるはずです。多様な人が集まることで新しい問いと答えが生まれます。蓄積されてきた知の上に新しいものを積み重ねていく類まれな場が大学です。蓄積された知を踏まえて新しいものを生むオープンなコミュニティのイメージを自ら作ることが重要です。

佐藤　正直なところ、東大は受験でも受験以外でも自らの宣伝などはしてきませんでしたね。

岩村　外から一方的に語られるだけでした。考えていることを自ら伝え、世間からの問いに応え、対話を通じて主体的発信のボリュームを増やすことでブランド力を高めたい。従来のイメージに新しいものを加えたいと思います。そのために、学内に横断型のコミュニケーションチームを立ち上げ、情報を集約して社会的な関心に合わせて発信していく体制を構築しているところです。また、学生も巻き込んで大学のブランドとレピュテーションを高めるためのスタジオのような施設をつくることも検討しています。

藤井　私が「世界の誰もが来たくなる大学」という言葉に込めた思いは、ひとつは世界から優れた研究者が集い、蓄積されてきた学術をもとに新しいものを生み出す場でありたいということですが、もちろんそれだけではありません。研究者も学生も職員も、海外の人も首都圏の人も地方の人も、若い人も年輩の人も、あらゆる人が大学へ来て、のびのびと活動できる場にしたいというイメージを持っています。同時に、組織としての能力も高め、どんな人が来てもしっかり活動できるよう環境を整える。そうして大学を誰もが来たくなる場にしたいのです。そのために学外から加わっていただいたのが岩村理事であり今泉理事でした。

佐藤　場が持つ意味は非常に重要です。空間としてあるだけでなく、主体としてそこに関わる人や、集まってくる資源も重要な要素で、そこで作り上げてきた知識や知恵も包含して場が成立するという考え方です。UTokyo Compassでも大学の場としての力を強調しています。

少しずらしたWhat ifの問いが出やすいカルチャーに

岩村　場ということでは、カルチャーの部分も重要だと思います。What、How、Whyなど様々なタイプの問いがありますが、多様性と包摂性があって心理的安全性が成立するカルチャーがあると、What if（もし～だったらどう？）という少しずらした問いが出てきやすいのです。そこから新しい価値が生まれてくる。東大はそういう場であってほしいと思います。

佐藤　先ほど問いが重要と言いましたが、直接答えてはいけない問いもある。その土俵の上で答えたら行き詰まりになるような問いです。それには答えずに耐えてよく考えてみる、あるいは問いの立て方自体を変えてみる。それが大学という場の力だと思います。ところが、受験では

藤井輝夫　総長
FUJII Teruo

本学生産技術研究所教授、生産技術研究所長、理事・副学長を経て2021年４月に第31代総長に就任。専門は応用マイクロ流体システム。学生時代はバンドサークルに所属。

岩村水樹　理事
IWAMURA Miki

電通、日本大学准教授などを経て、グーグルバイスプレジデント（現職）。2021年４月より本学理事。専門はマーケティング、ブランドマネジメント。学生時代は演劇雑誌作りに励む。

出た問いに正面から答えないと採点してもらえません。

藤井　問いそのものを疑う態度は受験では禁じ手ですね。

岩村　そういうギャップがあるからこそ、なおさら東大の中の世界はこうだよ、こんなにワクワクする世界があるよ、と受験の段階から伝えないといけません。

佐藤　これは複合的な課題です。試験の制度はきちんと維持していく。そうすることで東大が社会的発信力を持ってきたのも事実です。ただそれだけでは測れないことが、大学で学ぶためには重要だとも発信しなければなりません。

藤井　What ifという発想で問いの立て方を疑って、遠慮せずに違う問いを立てることができる環境を整えたいですね。大学に関わる人がのびのびと活動することを尊重できる場を作ることが心理的安全性につながります。そうでなければ、新しいものは生み出せないと思います。多様な人たちがいろいろな問いを投げかけあって共有しないといけません。

今泉　いろいろ試して失敗することが許容される環境がいいですね。その点、受験は失敗が許されない争いで、その頂点にあるのが東大です。本来、失敗がたくさんあるなかでいくつかが当たればいいのであって、おそらく研究者は、日々そういう環境で訓練されていると思います。しかし、事務職員はそうではなく、失敗が許されない中で働いています。そのマインドチェンジをどう行うのかが課題です。岩村理事が言った心理的安全性、「失敗してもいい」、「失敗ではなく、教訓又は成長なのだ」というカルチャーがなければ、事務職員から新しいものは出てこないでしょう。そうすると、そういう訓練をされている教員の側からしか新しいものが出てこず、教員が主導してそれを事務がサポートする、という従来の形から抜け出せないと思います。それでは、真の「教職協働」にはなり得ず、本当の意味での東大のリソース活用は難しくなります。対話を通じてそこを何とかできないかと思っています。

今泉柔剛　理事
IMAIZUMI Jugo

外務省、文部科学省、日本スポーツ振興センター、スポーツ庁を経て2021年７月より現職。専門は教育行政、スポーツ行政。学生時代は運動会応援部リーダーとして活躍。

佐藤　業務での失敗も過度に恐れず、多くはやりなおせるというふうに考える余裕も、大学にふさわしい。

藤井　実行に至るまでには検討のプロセスを乗り越えないといけませんが、少なくとも提案をどんどんできるようなマインドセットを持てるようにしたいです。

組織が失敗を恐れずに高い目標へ向かうためのOKR

岩村　UTokyo Compassの議論に取り入れた仕組みの一つに、OKR（Objective and Key Result）があります。これはまさに、失敗を含めて挑戦するための目標設定です。ムーンショットという言い方があります。月面着陸のように手が届かなさそうな高い目標を掲げることで従来と違う考え方やモチベーションが生まれる。失敗したらそこから学べばいいというのがOKRの考え方です。目標を達成しないと評価が下がるMBO（Management by Objectives）とは違い、組織が高い目標に向かって個人の力を結集するのを推進するのがOKRです。たとえばスポーツ選手は毎日失敗しているわけです。優勝や記録に到達するまではずっと失敗ともいえます。失敗しないと新しいチャレンジを実現することができないというのは重要な考え方だと思います。

佐藤　いろいろな測り方や捉え方を考案することの重要性は学問の世界では強調されますが、同じことが実は事務仕事の中にもあるでしょう。とにかく金銭的な成果を上げなければならないと外から決められている場ではない大学だからこそ、工夫の余地はあると思います。

藤井　いま、大学の進める取り組みは非常に幅広くなってきています。従来のようにしっかり教育と研究を行うだけではなく、社会人向け講座を開くとか、産業界とプロジェクトで連携するとか、活動が多岐にわたっています。そこでは、研究者の目線とは異なる視点から出たアイデアを活かす機会がたくさんあるだろうと思います。

佐藤　明治10年に東京大学が創立されたときも、大学がどういう存在であるべきかなんて誰もわかっていなかった。そのなかで試行錯誤し、対応を模索し、様々な組織が融合して、東京大学が形成されてきた。そしていまは、大学という機関が、社会のなかで何を果たすべきかが再びわからなくなっている時代かもしれません。

藤井　それ自体が大きな問いになりますよね。

佐藤　だからこそ自由に、かつしっかりと考えないといけません。そこは文科省から来ている今泉理事にも聞いてみたい

佐藤健二　執行役・副学長
SATO Kenji

法政大学助教授、本学人文社会系研究科教授、人文社会系研究科長・文学部長を経て、2019年４月より現職。専門は歴史社会学、メディア史。学生時代はよく余り物を使って独創的な料理をしていた。

撮影協力：総合図書館

ところですが。

今泉　そもそも、大学の役割は学校教育法に、国立大学の在り方は国立大学法人法に書かれています。そうした法的枠内で存在する国立大学が、教育と研究からもっと幅広いところまでカバーする存在に変わろうとしているわけです。わが国を代表するシンボリックな存在である東大が、機能を拡大し、誰もが来られる大学になって社会の変革を駆動していくとなると、大学の存在意義をとらえ直し、学校教育法の規定自体を変えるインパクトにつながる可能性があります。受験は日本の教育制度下の重要な存在であり、東大への入学者数は各高校の教育成果の重要な指標になっている現状がありますが、その東大が自ら敷居を低くする、そうは言っても、質を低くするのでなく活動できる幅を広くする、という意味ですが、これは学校教育制度においても国立大学法人制度においても、革命的な話になりうるかもしれません。

藤井　新しい大学モデルを構築することが必要ですね。

佐藤　だから東大だけの話ではないし、教育だけの話でもなくなるわけです。

岩村　議論を進めると、東大のグローバルなプレゼンスを上げる話につながると思います。たとえばハーバードやスタンフォードのような海外著名大学は学費の点でいえば東大よりずっとハードルが高いわけです。そして、東大はグローバルに見て知の研究の幅が広い。教育の面でも大学の位置付けが再定義されるなか、単純にエリートだけの場所ではない開かれた場としての大学はどうあるべきか。大学とは社会にとって何なのか。東大はそういう議論もリードできる位置にいます。そのなかでグローバルなプレゼンスを上げるための資産がたくさんある、というのがこの一年間で多くの先生方と話してきて持った印象です。

藤井　そういう資産を十分活用できる場にしたいですね。

岩村　学生も卒業生も、自分が東大生だとか東大出身だと言いたがらない人が多いようです。「いちおう東大です」と言うとか、何回か聞かれるまでは東大と言わないとか……。そこは進んで言いたくなるよう、自分が東大のアドボケート・アンバサダーとして活躍したいと思えるようにしたいです。卒業生は東大と社会をつなぐ鍵であり、ブランド・レピュテーション強化の要でもあると思っています。来たる創立150周年を見据えながら、研究者、学生、卒業生など、東大の多様な魅力を発信していきたいですね。

佐藤　受信する側の構えも影響しますよね。だから対話であり、コミュニケーションなのであって、聞く力も重要ですし、心に響くことばで目指すところを語ることも大切だと思います。

（2022年１月６日、総合図書館にて）

構成員と繰り返した総長対話

UTokyo Compassをまとめるにあたって重要だったのが、総長と学内構成員との間で続けられた「総長対話」です。2021年5月から9月まで、教職員は所属部局ごと、学生は学年ごとに、英語の回も織り交ぜながら、オンラインで総長と話す場が17回設けられ、成果は文案検討の場にフィードバックされてきました。今後は学外との対話の場も増やしたいと総長は願っています。

UTokyo Compassの推進にご協力を

東京大学基金（一任）へのご寄付はこちらから

・各種決済（クレジットカード/ネットバンキング/ペイジー/コンビニ/Amazon Pay）や銀行振込でお手続きができます
・税法上の優遇措置（寄付金控除）が適用されます
・お問合せは東京大学基金事務局（Tel：03-5841-1217）まで

大学×シネマの成果を投影する21ページ!

UTokyo映画祭

[オープニング対談]

卒業生監督×映画研究者

Jホラーの巨匠と「進振り」の素敵な関係とは?

「Jホラー」の第一人者として知られる中田秀夫監督は東大の卒業生。当初は理系だったのに文転して映画の道に進んだのには、駒場で出会ったある先生の存在がありました。その先生が立ち上げた研究室で映像文化を研究する竹峰義和先生との対談で、大学時代に得た刺激、代表作につながった経験、海外に出る意味、最新作の見どころまでを語っていただきました。東大の進学選択制度がなければ「貞子」は生まれなかったかも!?

竹峰義和 | 総合文化研究科教授
TAKEMINE Yoshikazu

専門はドイツ思想史・映像文化論。ヴァイマル時代のドイツ映画や映画亡命のテーマにも取り組む。著書に『〈救済〉のメーディウム』(東京大学出版会)、『アドルノ、複製技術へのまなざし』(青弓社)、共著に『映画論の冒険者たち』(東京大学出版会)など。

東京の豊かな映画環境に憧れて岡山から東大を受験

竹峰　中田監督は1980年に理科一類に入学されていますが、高校まではどのような少年でしたか。

中田　岡山の田舎で洋画好きの友達とよく映画館に行っていましたね。ブルース・リーに影響を受けて隣町の空手道場に通ったりもして。高校では、当初は京大志望だったんです。でも映画雑誌で名画座の情報を読んで東京で観られる映画の豊かさを知り、行くなら東京だなと思ったんです。

竹峰　東大に進むきっかけは東京の映画

2022

ここからお届けするのは、カンヌやベルリンでやっているものとは違う、大学ならではの映画祭です。用意したのは、映画監督と研究者の対談、映画研究者4人による研究紹介、映画人として活躍する卒業生紹介、東大に関する映画トピックス、研究者12人が薦める映画作品集の5企画。映画と大学の掛け算の成果をご覧ください。3、2、1、アクション!

二人の背景にあるのは中田監督の最新作品『嘘喰い』のイメージ画像です（協力：ワーナー・ブラザース）。

中田秀夫 | 映画監督 NAKATA Hideo

東京大学教養学部を卒業後、にっかつ撮影所に入社。助監督時代を経て1992年に『本当にあった怖い話』で監督デビュー。監督作品に『女優霊』『リング』『ガラスの脳』『ラストシーン』『ハリウッド監督学入門』『終わった人』『スマホを落としただけなのに』など。

環境だったんですね。入学後、蓮實重彦先生の映画論の授業を受講されたとか。

中田　シラバスで映画の授業を見つけて、クラスの映画好き3人で旧2号館に行って入ゼミ試験を受けました。和洋様々な映画に関する固有名詞20題が示され、知っていることを書けというもの。私は2問しか書けませんでした。半分は答えられないと授業に付いてこれないと言われたし、蓮實先生のディレッタント的な話に反感も持ち、途中退席しました。

竹峰　ほかに授業で印象に残っていることはありますか。

中田　後にノーベル賞候補になる奴とかフィールズ賞候補になる奴とか、同じク

ラスにすごい人が多くて、すぐに自分との差がわかりました。当時の先生でいま頭に浮かんだのは、物理の米谷民明先生、線形代数の藤原正彦先生です。ドイツ語の信貴辰喜先生は、厳しかったけど、駒場祭でトレーナーを作ってプレゼントしたらすごく喜んでくれて。怖いけど笑顔が優しかったのを覚えています。ドイツ語も英語も好きで、語学は成績もよかったですね。

同人誌活動の仲間と競って名画座に通い300本を鑑賞

竹峰　サークル活動は何かやっていましたか。

中田　理一は男ばかりでいかんと思い、女子がいそうなバドミントンのサークルに入りましたが、ハードな競技とわかってひと月でやめ、国際交流会というところに入って留学生に数学を教えたりしました。ワンゲル部にも３ヶ月いたし、蓮實ゼミから派生した『映画日和』という同人誌の活動もやりました。翻訳家の越前敏弥さん、哲学者の鈴木泉さん、映画監督の中西健二さんらが主なメンバーでした。蓮實ゼミで会い、京橋のフィルムセンター（現・国立映画アーカイブ）でも会い、文芸坐でも会うという感じで仲良くなって。先輩たちが同人誌を出していたのに刺激されて始めました。

竹峰　理一から文転して教養学部アジア学科に進んだんですね。

中田　当初は物理学科に行きたかったんですが、赤点スレスレで。いったん応用物理学科に決めたんですが、いろいろあって数学と物理が嫌になり、理系に挫折を感じて文転と留年を決めたんです。授業は週２日程度だったので、１日１本ペースで映画を観るようになりました。『映画日和』仲間の中西君は年間700本を誇っていましたが、私は300本ほど。名画座に通って蓮實先生が話していた古い作品を観まくりました。一方で、本多勝一さんに影響を受けてジャーナリスティックな興味を持ち、旧日本軍が中国や東南アジアで何をしたのかにも関心を持ちました。それでアジア学科に決めたんです。

竹峰　その後に蓮實ゼミに再入門したわけですね。先生の言葉で覚えているものはありますか。

中田　物語を追うのではなくて何が映っているかをよく見ろ、ということと、不在を在として表すのが表現の根本だ、ということです。映画には本来奥行きがないが、ジョン・フォード監督は遠景にある小屋のドアが開いて向こうまで見渡せる様子を映すことで奥行きを感じさせている、そういう工夫を丁寧に見るんだ、と。

竹峰　卒論はフィリピン映画がテーマだったそうですね。

中田　はい。まずマニラに渡ってフィリピンの名監督たちの映画を20本ほど観ました。土着の文化とスペイン文化とアメリカ文化がまじったユニークな映画文化が50年代に花開いていました。その辺りの話で７割、残りはフィリピン映画の現況という構成で書きました。

竹峰　すごい行動力ですね。卒論のために海外調査に行く学生は少ないのでは？

中田　単に現地に行かないと書けなかったんです。フィリピンは留年時にバックパッカーとして訪れました。ベニグノ暗殺１周年の大きなデモがあった頃で、いまから変わろうという息吹を感じました。ルソンやサマールで戦争のことを話してくれた古老たちが概して日本に好意的だったという経験も影響しているかもしれません。

竹峰　学生時代に観て特に印象的だった作品は何ですか。

中田　卒業の年に観たマックス・オフュルス監督の『忘れじの面影』です。GWに観て、完璧な映画だ、覚えたいと思い、上映期間10日のうち７日も観に行きました。いけないことですがテレコで録音もした。この映画を観て、初めてスクリーンの反対側に行きたいという欲求が芽生えたんです。フィルムセンターのジョン・フォード特集を観に行ったら淀川長治さんがいて、若者がフォードのサイレントを観に来るなんて熱心ですね、と語りかけてくれたのもうれしかったです。

竹峰　その後はにっかつ撮影所に入所されています。黄金期の撮影所の空気を知る最後の世代、でしょうか。

中田　最後の世代の話を聞いた世代、ですね。『ビー・バップ・ハイスクール』で那須博之監督に付いたのを発端に、小沼勝、澤井信一郎、神代辰巳、降旗康男、工藤栄一といった監督たちの作品に助監督として付いて学びました。現場では、東大出はダメだなどと言われてむっとしたこともありますよ。同じ東大出身だったせいか、降旗康男監督はかわいがってくれました。私が青森でロケすると聞いて『網走番外地』で使った牛革の上下の下着をくださって。室内ではヒートテックよりよほど暑いんですが、降旗監督がくれたからと思って脱がずにぼーっとしながら撮っていました。

「理系の学問に挫折して駒場のアジア学科へ進み映画の道を志しました」

在学中にバイトした撮影所で感じた女優の念がヒントに

竹峰　1992年には文部省芸術家在外研修員として渡英していますね。

中田　助監督生活も６年目で、すでにロマンポルノは終わり、先輩方はテレビの仕事をやるようになっていました。自分は映画をやりたかったのにこのままでいいのかと考え始めた頃に留学の制度を知り、海外で頭を冷やして考えたいという思いから受けたんです。面接には映画評論家の品田雄吉さんがいて、外国で今の自分を冷静に見つめ直すために行きたいと正直に言ったらOKが出ました。せっかくだから現地で何かやったらと言われ、ジョセフ・ロージー監督のドキュメンタリーに着手したんですが、仕上げるのにかなり時間とお金がかかり、いったん帰国し、資金を捻出しようと必死に企画を考えました。その一つがやっと通り、またイギリスに戻って仕上げることができました。

竹峰　その企画がJホラーの出発点と言われる『女優霊』ですね。

中田　このとき映画のフィルムが最後どうなるか調べたら、火葬と同じで炉に投げ込むだけ。無名のまま映画界から去った女優とか、監督になれずじまいの人など、フィルムが焼かれると彼らの怨念が集積するかも、と思いました。あと、大学５年時に京都の大映でバイトで働いた際、撮影ステージに入って見上げたら、無数の映画人の吐息が聞こえた気がしました。皆が撮影のためにステージに集まり、終わった後に何かが残っているという感じが好きでした。深夜に忘れ物を取りにステージに入るとまだ照明の熱気が残っていて、昼間に監督に叱られた女優の念が残っている気がしたり。こうした経験が『女優霊』につながりました。

竹峰　３年前、「貞子はなぜ怖いのか」という題の公開講義を行いました。通常、観客は一方的に画面を見ますが、『リング』では貞子から観客が見られ、客体となります。貞子は非人間的なまなざしを持っていて、写真やVHSやテレビなどのテクノロジーメディアが決定的な役割を果たしている。貞子は念写で映像をつくり最後はテレビから飛び出し、シャッターを切るように一瞬だけ目を見せると被写体が反転して固定される。貞子はある種の殺人カメラとして捉えられる、という話をしました。そんな解釈はいかがでしょうか。

中田　おもしろいですね。貞子から見られる感覚を意識したわけではないですが、いかにして客を驚かせるかはずっと考えていました。『リング』ができる前に批評家たちに台本を渡して取材を受けたんですが、貞子がテレビから這い出す部分には「？」という反応でした。笑う人もいましたね。でも、近づくとは予想できても、這い出るとはまず予想しない。テレビを通して見ているものだと思いきや実際に向かってくる。これこそがポイントだと思い、効果音の方と喧嘩しながら入れたシーンでした。

竹峰　2005年に『ザ・リング２』でハリウッドデビューされ、その後もイギリスで『チャットルーム』を監督。そうした経験を作品にも活かしています。日本と海外の違いは感じましたか。

中田　あるカメラマンは「ハリウッドには映画文化はないが映画産業がある」と言いました。他国の場合は「映画産業はないが映画文化はある」。日本はぎりぎり両方あるかなと思います。たとえば、向こうでは試写を繰り返して反応を5段階評価で数値化します。大衆の評価を取り入れて作品を仕上げる。自動車などの工業製品と同じ感覚です。自分はそれが割と性に合っていると思いました。

竹峰　さて、新作の『嘘喰い』は人気漫画が原作でギャンブルがテーマですね。

中田　相手に嘘を見抜かれて負けたら死ぬという極端な世界です。ユニークな歴史観を軸に、闇の世界のトップを取ることが人生の目標という、ある意味ピュアな主人公を描いています。横浜流星くんのファンや原作ファンにどう楽しんでもらえるか考えながら撮りました。エンタメなので肩肘張らずに観てほしいですね。

竹峰　最後に、後輩たちへメッセージをいただけますか。

中田　海外に出て知見を広めておくと後に役立つことが多々あります。私は学生の頃から語学が好きでしたが、初めて英語で仕事したのはハリウッドでした。通訳をつけるかと聞かれましたが、いや、僕の英語についてきてくれと返しました。語学は海外に出るベースになります。しっかり身につけて海外に雄飛してほしいですね。

（2021年11月29日、駒場18号館ホールにて）

「『貞子』はある種の殺人カメラとして捉えられるのでは？」

『嘘喰い』

相手の嘘を見破れなければ即死という究極の騙し合いデスゲームを描く。原作は週刊ヤングジャンプで連載された迫稔雄の漫画作品。ババ抜き、ルーレット、脱出ゲーム、ポーカー……。どんなイカサマも見破る天才ギャンブラーの主人公を横浜流星が演じる。
https://wwws.warnerbros.co.jp/usogui-movie/

東大映画研究Now

マチュー･カペル／文
総合文化研究科准教授
Mathieu CAPEL

日本映画史

日本映画に独特の姿と形をもたらした高度経済成長期という新しいパラダイム

「映画は何を考えているのか？」。映画研究者のジャック・オーモンは1996年に問いかけました。この問いを引き継ぎながら別の言い方にしてみましょう。大衆によっても映画批評家によっても、映画史の120年はおよそ十年ごとに区分けして語られてきました。たとえば、60年代の映画が考えていることは、50年代の映画が考えていることと違うのでしょうか。違うとすれば、それは、なぜ、いつ変わったのでしょうか。

映画の「考え方」は、ストーリーや内容にとどまらず、画面に現れるフォルム（形式）やフィギュール（姿）にあります。その観点から、より複雑な語り方が必要になるでしょう。通常の映画史では、1960年の安保闘争と同時期に大島渚、吉田喜重、篠田正浩らが代表する「松竹ヌーベル・バーグ」が登場したことで急に映画が変わり、1970年の安保闘争と同時期に映画産業の停滞が強まったことで60年代映画が終わった、と語られます。フォルムとフィギュールは別の生理的リズムを持つように見えます。その限りにおいて、例の50年代映画や60年代映画というカテゴリーは無効化されます。当時、確かに映画表現は変わりましたが、それは、新しいパラダイムとしての、あるいは新しい言説空間としての高度経済成長期ができたから。高度経済成長期は日本映画に独特のフォルムとフィギュールをもたらしました。

高度経済成長期の新しさは、松本俊夫監督のいう「日常のヴェール」に隠蔽された秩序として発見され、新世代の映画監督たちは、人々は無意識な構造に支配されると断言しました。そして、映画の使命はそうした「ヴェール」を破り不可視性を可視化することとなりました（それは少なくとも19世紀以降の芸術の古典的な役割に似ている）。さて、可視化された景色はどう見えたでしょうか。

世界はどこまでも断片化しつつあります。その断片は、三次元的なものではなく、札のように表面的なものです。その現象は勿論、人間にも見えます。職業、都市計画、交通機

鄭 仁善／文
人文社会系研究科助教
CHUNG Insun

映画政策学

ハリウッド映画が日本を経由して韓国に輸入された知られざる理由

『イカゲーム』や『パラサイト』など、韓国発の「Kコンテンツ」が脚光を浴びていますが、実は1990年代中頃まで韓国の映画産業は極めて零細でした。映画市場の開放は1980年代後半。それ以前、映画産業は政府に掌握され、輸入できる本数や業者などが管理されていました。市場の零細さと不透明性のためか、ハリウッド映画の直輸入はほぼ不可能でした。「アメリカが相手にしてくれないから日本へ行った」、「ハリウッド極東支社が日本にあったので日本に行った」という、1960-70年代に輸入に携わった映画人の証言が数多く見られます。1980年代中頃まで、ほとんどのアメリカ映画は日本経由で韓国に輸入されていたようです。

ここから様々な疑問が生まれます。なぜ、アメリカ映画を日本から持ってきたのか。業者は誰と取引をしたのか。取引は正式なものだったのか。ハリウッドスタジオは極東支社にどんな権限を与えたのか。解答を探る旅程は容易ではありません。韓国映像資料院にある元老映画人の口述資料を探しても、日本（極東）支社との関わりを示す証言は見つかりません。ただ、そこに度々登場するのは、アメリカ映画の販売を中継する在日朝鮮人ブローカーの存在でした。1974年の新聞記事には、アメリカ映画『サムソンとデリラ』を東京支社と東京の洋画中継商と各々契約した二人の業者が法的紛争を起こしたとあります。この記事は、ブローカーを通じた取引には正式でないものも存在した可能性を示唆します。ただ、彼らの存在はアメリカ映画協会（MPAA）も知っていました。1976年にMPAAの会長は韓国を訪問し、ブローカーの暴利を防ぐため、ハリウッドメジャーの共同支社を設立したいと表明しましたが、計画経済体制だった当時の韓国では不可能でした。

アメリカ映画の輸入過程が露呈したように、韓国社会における日本の影響は独立後も続きました。アメリカは地理的にも言語的にも人脈面でも遠地でしたが、日本はあらゆる面で近い国でした。当時、輸入業者の相当数が、植民地時代に日本で生まれたか教育を受けた人でした。彼らの足が日本に向かうのは植民地の経験と無関係とは言えません。洋画の輸

関、行政などによって人の身体は解体し、流通する品物となりました。マスメディアと消費社会に深く関わるその新しい状況は、「世界の粒子状態化」と名づけられました。その特徴は、限りない断片の増殖、一様化、表面化、フラクタル化。これがどんなに映像の大量生産に似ているかは誰の眼にも明らかでしょう。

結果的に、思考が用いてきた概念、または二項対立（論理学の法則である無矛盾律まで！）は無効になります。階級のヒエラルキー、新封建制の圧迫、家庭構造の変容のような戦後映画のテーマは依然として存在しますが、新しい粒子状態が登場したため、本来持っていた意味は不可逆的に変わります。その転換こそは「60年代映画」、というより「高度経済成長期映画」の根本的な意味を定義します。それ以後の「世界の粒子状態化」が、表面に魅惑された80年代にはどうなったのか、というのが、現在の私の研究にほかなりません。

吉田喜重『日本脱出』　DVD 3,080円（税込）
発売元・販売元：松竹　©1964 松竹株式会社

断片化、増殖、表面化、二次元化など、すなわち新しいパラダイムとしての高度経済成長期がもたらした形式は如何に人をうろたえさせたか、如何に人間体験を根本的に覆したかは、吉田監督、松本監督または増村監督の映画作品において早くも見事に映像化され、その転換に関する貴重なドキュメントとして残ります。

松本俊夫『つぶれかかった右目のために』
図版提供：NPO法人戦後映像芸術アーカイブ

増村保造『巨人と玩具』　DVD ¥3,080（税込）発売元・販売元：KADOKAWA ©KADOKAWA 1958

カペル先生の著書
『日本脱出 1960年代の日本映画』（Les Prairies ordinaires）2015年

東京大学が擁する約6000人の研究者のうち、映画を研究対象にしている4名が、各1200字の寄稿で自分の研究について紹介します。
テーマは、高度経済成長期の日本映画、韓国における外国映画、中国系移民による映画製作、記録映画のアーカイブ。
芸術大学とはひと味違う総合大学の映画研究の姿をご覧ください。

入基準は日本でヒットしたかどうかであり、ポスターやチラシも日本のものを文字だけ韓国語に差し替え、そのまま使いました。

昨年末、1960年代から長年20世紀フォックスの日本支社で勤めた古澤利夫氏にインタビューしました。自ら担当した日本版『スター・ウォーズ』のポスターが韓国でそのまま使われていたのを知らなかったようです。しかし、知っていたとしても、結果的に本社の売上にプラスになるなら意に介さなかっただろうとのことでした。

この研究は、1950年代以降の東アジアをめぐる国際情勢や植民地主義、さらにディアスポラ問題とも絡み合いながら、その時代、ローカルに生きていた人々がどのようにグローバル化に行き当たったかを探求するものでもあります。散らばっているパズルのピースを組み合わせる過程を楽しんでいます。

500本以上の映画の宣伝・配給に携わり、『映画の力』（ビジネス社）の著書もある古澤利夫さんのインタビューの様子

MPAA会長による韓国訪問

出典：韓国国家記録院

1976年、韓国文化部長官に面会し、極東支社設立を打診するMPAAのジャック・ヴァレンティ会長。

韓国映画市場の開放前後の米映画の直輸入本数変化

年度	国産製作本数（本）	輸入本数（本）	ハリウッド映画の直配本数（本）	国内製作の割合（%）
1984	81	25	0	76.4
1985	80	27	0	74.8
1986	73	50	0	59.3
1987	89	84	0	51.4
1988	87	175	1	33.2
1989	110	264	15	29.4
1990	111	276	47	28.7
1991	121	256	45	32.1
1992	96	319	57	23.1
1993	63	347	64	15.4

出典：映画振興委員会（2000）、『韓国映画年鑑』

韓国の映画市場が開放されたのは1988年。国内映画人の猛反発を受けながらハリウッドメジャースタジオは韓国に共同支社（UIP）を設立し、韓国の映画館に映画を直接配給し始めました。

鄭先生の著書
『日韓インディペンデント映画の形成と発展』（せりか書房）2017年

韓燕麗／文
総合文化研究科教授
HAN Yanli

中国語映画研究

中国系移民の映画とアイデンティティ ――ナショナル・シネマの枠組みを突き破って

大学院時代、恩師から「自分の生き方と関連するような研究をしなさい」と言われた時、内心忸怩たるものがありました。映画史専門の私は、冷徹な目で歴史的記述ないし映像を分析することこそが研究だと考えていました。しかし振り返ってみますと、中国大陸以外の場所に居住する中国系移民によって製作された中国語映画とそのアイデンティティの問題について研究してきた自分は、無意識のうちに恩師の言葉から大きな影響を受けていたかもしれません。

国籍を指標として映画を分類し批評することが、映画研究の主流でしょう。しかし国を単位とする映画研究のアプローチでは、もはや把握しきれない映画史の問題が存在しています。中国語圏の映画で考える場合、トーキー映画が大きな人気を博した1930年代初頭前後から、アメリカや東南アジアなど中国大陸以外の場所において、中国系の移民たちが自らの母国語を使って異境の地で映画を作り始めていました。例えば1933年のサンフランシスコのチャイナタウンで、中国系移民による映画製作会社が設立され、自社専用の映画館までチャイナタウンの中で建てられました。1950年代までに数十本の広東語映画がかの地で作られましたが、これらの映画は、映画の前に国名を冠するいかなるナショナル・シネマの枠組みにも収まらないものであります。

アメリカとは限らず、移民たちのアイデンティティの構築ないし変容するプロセスが、各時期に各地で製作されたこれらの国籍を持たない中国語映画のフィルムにさまざまな刻印を残していました。知られざるこれらの中国語映画のテクストそのものに注目することによって、歴史学や人類学だけでは究明できない中国系移民の複雑な心像地理を探ることができます。その考察は海外で暮らしている私自身にとっての内省の旅でもありました。中国で生まれ育ち、中国語による教育を受けた漢民族の中国人である私は、自らが「中国人」だと名乗る意味を、研究を通じて再考する機会が与えられたのです。移民のアイデンティティが構築されていったポリティックスは、中央集権的な国民アイデンティティへの同化に埋没されない「個」としての生き方を模索するわれわれに、新たなアイデンティティを把握するための座標軸を提供してくれればいいと、切に願います。

1933年にサンフランシスコで中国系移民によって設立された映画会社「大観影片公司」(Grandview Film Company)における撮影風景。

戦時中に「大観影片公司」が製作した映画『華僑之光』(1940) のパンフレット表紙。映画は「われわれにも国土を守る責任がある」と民族意識・国家意識を強調するものであった。

「大観影片公司」が戦後に製作したカラー映画のワンシーン。「アメリカン・スタイル」の生活を何の不自由もなく思う存分に楽しんでいる様子が描かれている。太平洋戦争の同盟国である中国の出身者に対して帰化を認めたアメリカ政府の移民政策の転換が背景にあると考えられる。

韓先生の著書
『ナショナル・シネマの彼方にて』
(晃洋書房) 2014年

丹羽美之／文
情報学環教授
https://media-journalism.org
NIWA Yoshiyuki

映画アーカイブ学

劇映画に負けない歴史を持つ記録映画1万本を収集・保存し活用へ

あなたは「映画」という言葉から、どんな作品を思い浮かべるでしょうか。多くの人がまずは劇映画、特に映画館で公開される商業的な娯楽作品を思い浮かべるのではないかと思います。しかし、映画の歴史を掘り起こすと、劇映画以外にも多種多様なタイプの映画があったことに気づきます。教育映画、文化映画、科学映画、ニュース映画、PR映画、ドキュメンタリー映画……。これらは映画館以外の場所で上映されることも多く、映画史では「傍流」と見なされてきましたが、劇映画に負けず劣らずユニークで豊かな歴史をもっています。

私の研究室では、2008年から記録映画アーカイブ・プロジェクトを立ち上げ、従来の映画史では忘れられがちな様々なタイプの記録映画を収集・保存する活動を続けてきました。実はいま、これら多くの貴重な記録映画が散逸や消失の危機にさらされています。保管状態が良くないためフィルムの劣化が急速に進んでいるだけでなく、制作会社の倒産や解散によってフィルムの廃棄や散逸もはじまっています。一度失われてしまえば二度と見ることのできない貴重な記録を救い出すために、記録映画保存センターや国立映画アーカイブなどと連携しながら、保存活動を進めています。

私たちが最初のモデルケースとして取り組んだのが、戦後日本を代表する記録映画会社、岩波映画製作所が制作した約4000本のフィルム原版の収集・保存です。岩波映画製作所は1950年、物理学者の中谷宇吉郎が中心になり、岩波書店の後押しで科学映画や社会教育映画の制作をはじめました。その後、日本の高度経済成長を支えた電力、造船、製鉄、電機などの基幹産業を中心に、幅広くPR映画を世に送り出しました。これらは戦後日本の社会・文化・産業・科学技術のかけがえのない記録です。また岩波映画は数多くの名作や話題作、優れた映画人を輩出したことでも知られています。羽仁進、羽田澄子、時枝俊江、黒木和雄、土本典昭、小川紳介など、その後の映画界を担う若い作り手たちがここから育ちました。

記録映画アーカイブでは、この岩波映画を皮切りに、日本映画新社、英映画社、記録映画社、桜映画社、東京文映など、これまでに合計で約1万本の記録映画を収集しました。記録映画保存センターが中心となって、保存すべき記録映画の収集、複雑な権利処理（著作権や原版所有権など）、データベースの作成、国立映画アーカイブへのフィルム移管作業などを行っています。また収集したフィルムを活用して、シンポジウムや上映会の開催、DVDブック『記録映画アーカイブ』（全3巻）の出版、新作映画の公開などにも取り組んできました。今後も記録映画アーカイブの活動を通して、貴重なフィルムを救い出すとともに、劇映画にとどまらない映画の多様な可能性を発信していく予定です。

記録映画保存センターによるフィルム移管作業

「岩波映画の1億フレーム」「戦後復興から高度成長へ」「戦後史の切断面」の全3巻からなる『記録映画アーカイブ』のDVDブック（東京大学出版会）

1.『たのしい科学』（1957-62、岩波映画製作所）　2.『町の政治』（1957、岩波映画製作所）　3.『佐久間ダム 総集編』（1959、岩波映画製作所）

淡青色の映画人

東京大学の卒業生や
学生のなかから、
映画に関わる活動を
行っている皆さんをピックアップし、
3人の監督に
ご登場いただきました。
最近の東大関連映画トピックスと
あわせて紹介します。

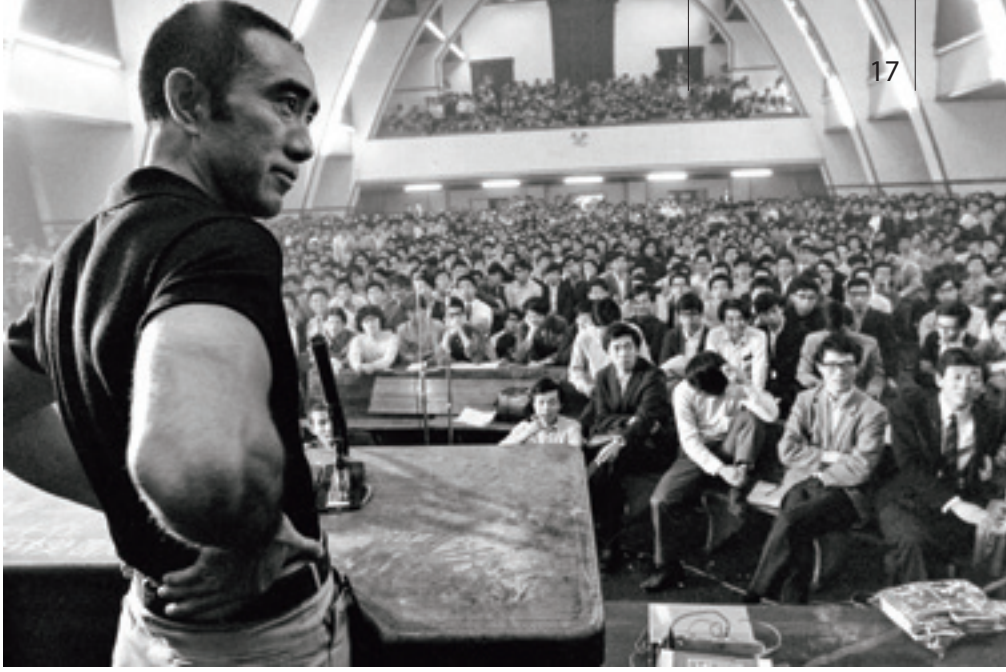
淡青色の映画人 1

豊島圭介さん

TOYOSHIMA Keisuke

半世紀前に駒場で行われた伝説の討論会を熱と敬意と言葉のドキュメンタリーに

監督の後ろに見えるのは900番
教室の演壇に直結する通用口



辱めを受けた場合には自決する覚悟で討論会に臨んだという三島と満員の聴衆たち　撮影：新潮社 清水寛

1969年5月13日、駒場で一つの討論会が行われました。東大全共闘の学生の求めに応じて900番教室に乗り込んだのは、三島由紀夫。市ヶ谷駐屯地で割腹自殺する1年半ほど前に、1000人超の聴衆と4時間にわたって熱く真摯に言葉で対決する伝説の討論会となりました。

このときにTBSが撮影した記録映像を軸に、当時の関係者13人の証言を集めて全貌を伝えるドキュメンタリー作品を撮ったのが、教養学部出身の豊島圭介監督です。浜松で育った映画好きの少年が東大を志したきっかけは、本学の研究者が書いた一冊のブックレットでした。

「高3のとき、書店で『映画からの解放』という本を手に取りました。小津安二郎監督の作品を予備校生向けに解説した講演のまとめ本でしたが、そのなかに、表象文化論という新しい学科を立ち上げたから興味を持ったらぜひ来てほしいと書いてあったんです。著者は蓮實重彦先生でした」

上京して予備校に入り、「気が狂いそうになるほど」勉強し、文科三類へ。1年生の頃から映画関連の授業を履修し、三木秀則さん（現・鉄緑会主任）や木下千花さん（現・京都大学教授）との交流を通して自主映画を撮るようになった豊島さん。4年生となり、松浦寿輝先生の指導で書いた卒論のテーマは、エルンスト・ルビッチの『生きるべきか死ぬべきか』。ドイツのワルシャワ侵攻時に『ハムレット』を上演する劇団員がナチスに扮して逃げるという世界史的にも重要な作品に向き合いましたが、いまも心に刺さるのは、審査の場で蓮實先生に言われた言葉でした。

「第一部で歴史的な位置付けを、第二部で映画の構造を分析したんですが、『この先の第三部を書かないと意味がない』と言われました。新しい発見を試みないとダメだ、と。僕は器用なほうでどんな分野でもある程度対応する自信がありますが、映画でも「第三部」を書けていないのではないか、といまも自問自答しています」

卒業後にアメリカの映画学校（AFI）に留学し、帰国後はホラー、コメディ、アイドルものなどジャンルを問わず職業映画監督として活躍してきた豊島さんですが、ドキュメンタリーの分野は手付かずでした。社会問題の現場に長期間入り込んで撮る小川紳介監督や佐藤真監督のやり方を在学中に知り、自分にはとても手に負えないものだと思っていたのです。学生運動に関わる世代ではなく、三島作品の大ファンでもありませんでした。それでも、同窓ながら学生時代は面識がなかったプロデューサーの刀根鉄太さんから打診を受けた豊島監督は、企画を引き受けます。三島自決のインパクトを知らない世代の視点で作りたいと言われたのが決め手となりました。

「監督としてできることは限られます。登壇者のなかでも特に印象が強烈な、赤ん坊を抱いた舌鋒鋭い青年の現在の姿と感情の動きを撮らないと映画にならないと思いました。現役の演劇人で独特の宇宙を持つ芥正彦さんの取材は一筋縄ではいかず、叱られているような感触の4時間でしたが、一方で「撮れてる!」と手応えも感じていました」

13人の取材と映像の編集を通して豊島監督が仮想敵のように意識するようになったものがありました。それは、醜い言葉が匿名で発せられ、拡散され、人を傷つけることも少なくないSNSのコミュニケーションです。

「討論の中身を現代の我々がすべて理解できるとは思いません。でも、三島だ、全共闘だ、ときちんと名乗りを上げ、相手の呼吸が感じられる距離で言葉をぶつけ合う姿に、コミュニケーションの正しさを感じました」

本編のナレーションに監督が組み入れたのは「討論会にあったのは熱と敬意と言葉である」という一節でした。「第三部」の存在は、ここからも確かに伝わってきます。

映画本編より、紛争時の安田講堂と討論会の様子。赤ちゃんを抱っこするのが芥さん。

『三島由紀夫vs東大全共闘　50年目の真実』
監督：豊島圭介　出演：三島由紀夫、芥正彦、木村修ほか　ナレーション：東出昌大　配給：ギャガ　2020年　DVD 4,180円（税込）発売元：TBSテレビ　販売元：TCエンタテインメント

©2020映画「三島由紀夫vs東大全共闘 50年目の真実」製作委員会

豊島監督の著書『東大怪談』（サイゾー出版）
遭遇した怖い人間の話や超常現象の体験など東大出身者13人による怪談を集めた本。「理詰めで考える東大出身者は安易に超常現象を鵜呑みにしないはず。そういう人が体験したというなら本当かもしれない、という意図です。監督デビュー作の『怪談新耳袋』をはじめとするホラー作品の経験と三島の映画で培ったインタビュー力を使って書いた、怪談を語る東大出身者にフォーカスした一作です」

取材協力：ルヴェソンヴェール駒場　旧制一高の同窓会館を改修したフランス料理店＆ゲストハウス。https://leversonverre-tokyo.com/restaurant/komaba.html

淡青色の映画人 2

後藤美波さん

GOTO Minami

大学のプログラムをフルに活用した遠州浜松生まれのフィルムメーカー

東大が2012年度から国内外で実施している体験活動プログラムは、学生が自分と異なる文化や価値観に触れるための取り組み。年間数十もの企画を多くの卒業生が支援してくれています。このプログラムで2014年夏に行われた「ロサンゼルスで映画を製作する」という企画に参加した一人が、『ドラゴン桜』ファンの父の影響で東大に進んだという後藤さん。当時は文学部で美術史を学ぶ3年生でした。

「制作現場の見学の際、向こうで映画を学ぶ先輩と話し、米国の大学のフィルムスクールというものを知りました。当初は美術館の学芸員志望でしたが、映像配信サービスの普及を見て、田舎でもアクセスしやすい映画の世界により大きな可能性を感じていた頃で、こっちかなと思いました」

もう一つ重要だったのは、学部生も出願できる情報学環教育部の研究生となって受けた授業で経験したドキュメンタリー制作です。上野のストリップ劇場に半年通って約10分間の短編を作った際の充実感が、卒業後の進路の決め手になったのです。そしてこの短編は、コロンビア大学大学院のフィルムスクールに応募する際の重要なポートフォリオとなりました。

「学費がすごく高く、学校のパーティーの残り物だけで数日間過ごすなど、1年目は貧乏暮しでしたが、2年目から米国伊藤財団FUTIなどの奨学金をいただいたおかげで楽になりました。映画制作の全般を学びましたが、規模や資金調達の面でも様々なやり方があるとわかったのが収穫でした」

在学中に構想を練った企画がShort Shorts Film Festival & Asia 2017で最優秀賞を受賞し、デビュー作を撮る権利を得た後藤さん。田舎の高校生が管理色の強い学校に小さな反乱を起こして状況を打ち破る姿を描いた『ブレイカーズ』(2018年)は、各国の映画祭で好評を博し、いまもオンライン配信されています。この映画の舞台として監督が選んだのは故郷の浜松でした。

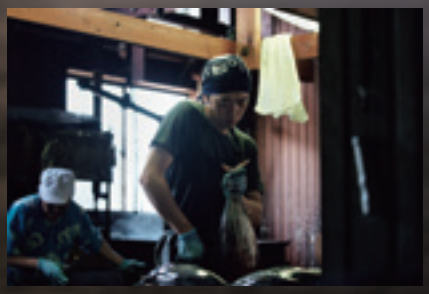
「気軽にアクセスできる美術館も少ないし、テレビに映るのは東京ばかり。昔はずっと世界から取り残されている感覚がありました。そんな思いは後輩たちに味わわせたくない。映像を通して、自分の町も世界とつながっていると感じてほしかったんです」

2020年の『Shadow Piece』ではフェミニズムを考えるドキュメンタリーに挑戦し、焼津が舞台の最新作ではジェンダーによる役割固定の問題を織り込み、現在は静岡と東京と京都で生きる3人の女性を描く次回作の脚本を執筆中。若きフィルムメーカーの今後を楽しみにしているのは、遠州の後輩たちや体験活動プログラムの担当者だけではないでしょう。

「東大時代に最も刺激を受けた授業は小林真理先生のアートマネジメント理論でした」

『海の色は夢のつづき』

『青天を衝け』などに出演した長谷川直紀さん(焼津市出身)と宝塚で男役として活躍した永楠あゆ美さんの俳優夫妻が、Facebook経由で後藤監督(本作では南あさひ名義)にオファーしたことから実現した作品。海中カメラマンになる夢と、長く続いてきた家業である焼津なまり節工場を継ぐ責任との間で葛藤する主人公の成長を描く。2022年初夏以降、静岡県の複数館での上映を目指しています。



淡青色の映画人 3

小手川将さん

KOTEGAWA Sho

総合文化研究科博士課程２年

寮日誌から喚起された映像と言葉で迫る一高生のアイデンティティ

今春、『籠城』というタイトルの映画が公開されます。教養学部の前身、旧制第一高等学校（一高）の寮で営まれてきた特色ある共同生活の姿を様々な資料から浮かび上がらせる一作。東京大学が北京大学と共同運営する東アジア藝文書院（EAA）が進めてきた「一高プロジェクト」の一環で、大学院生の小手川さんが監督を務めました。

「EAA駒場オフィスがある101号館は一高時代に中国人留学生の学び舎でした。関連資料の調査が行われ、その成果を展示する予定でしたが、コロナ禍で学内展示しか叶いませんでした。映像ならオンラインで多くの人に見てもらえるかも、と始まったのがこの企画です。学生スタッフの募集を知り、映像制作に携わりたいと思って応募しました」

青山学院大学時代に小林康夫先生の授業で短編映画を撮ったことがある小手川さんですが、一高のことはほぼ初耳。資料を読み込んでみて初めて、本郷からの移転、全員入寮の原則、育まれてきた自治の伝統を知りました。なかでも興味深かったのは寮日誌です。

「最近の寮生はたるんでいる、生活への情熱が足りない、食堂の使い方が悪い……。自治委員会の議論の様子がこと細かに綴られていて、事務文書のような資料とは違い、当時の学生たちのいきいきした姿が伝わります。これなら映画になりそうだと思いました」

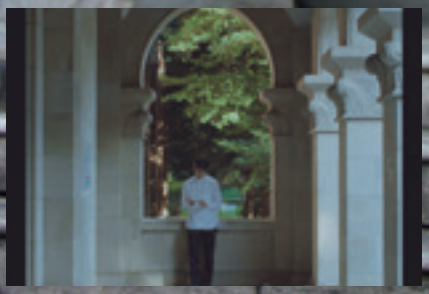
総合文化研究科でロシア映画を研究する小手川さんが選んだのは、ドキュメンタリーとフィクションを融合させるスタイル。画面の多くを占めるのは資料を撮った映像ですが、一高を研究する大学院生の「わたし」を登場させることで物語的な効果も持たせたのには、アレクサンドル・ソクーロフ監督の影響もあるとか。そして、構想を進めるにあたって特に注目したのは、言葉でした。

「一高の生徒たちは、寮日誌などの記録を繙き、書かれた言葉から滲み出る「一高精神」に照らして反省し、自らの生活を書き継ぎました。受け継いできた言葉を個別の事例にあてはめて行動し、記録し、また参照するという循環の回路が一高のアイデンティティを形成してきたと思います」

資料の内容を伝える説明的な声、「わたし」による内省の声、それにツッコミを入れる他者の声など、複数の役割の言葉を、学生を中心とする声の出演者たちに発してもらい、一高生たちの声が現代人に身近に響くことを目指した小手川監督。今後、学内公開を経て、国際映画祭への出品、北京大学など内外の大学での上映会を実施する予定です。よくも悪くも一高を象徴する言葉がタイトルですが、作品は外の世界に出ることを志しています。

『籠城』

プロデューサーの髙山花子EAA特任助教のほか、３名のEAAリサーチ・アシスタント（小手川さん、共同脚本の高原智史さん、記録の日隈脩一郎さん）を主要メンバーとして制作された本作。作曲家の久保田翠さんによる「嗚呼玉杯」「新墾」などの一高寮歌をアレンジした音楽や、寮から各施設へ通じていた地下道で撮影したラストにも注目です。東アジア藝文書院→



駒場101号館の前にて。小手川さんは表象文化論コースの学生で、本作には同研究室の関係者が多く参加しています。

実はたくさんいる

淡青色の映画人

日本の映画史を彩ってきた東大ゆかりの映画監督を
代表作とともにリストアップ。
実はあの監督もこの監督も東大育ちだった!

秋原正俊	文学部	『蜘蛛の糸』『河童』
荒木伸二	教養学部	『人数の町』
伊坂 聡	文学部	『Focus』『ミスター・ルーキー』
今井 正	文学部	『ひめゆりの塔』『仇討』
牛原虚彦	文学部	『虹男』『彼と東京』
佐藤純彌	文学部	『野性の証明』『新幹線大爆破』
瀬川昌治	文学部	『喜劇 急行列車』『哀しい気分でジョーク』
想田和弘※	文学部	『精神』『港町』
高畑 勲	文学部	『火垂るの墓』『おもひでぽろぽろ』
中島貞夫	文学部	『激動の 1750 日』『脱獄広島殺人囚』
中西健二	文学部	『青い鳥』『花のあと』
中原 俊	文学部	『櫻の園』『コキーユ』
那須博之	経済学部	『ビー・バップ・ハイスクール』『紳士同盟』
長谷川和彦	文学部	『太陽を盗んだ男』『青春の殺人者』
濱口竜介※	文学部	『寝ても覚めても』『ドライブ・マイ・カー』
藤田敏八	文学部	『スローなブギにしてくれ』『帰らざる日々』
舩橋 淳	教養学部	『ビッグ・リバー』『フタバから遠く離れて』
降旗康男	文学部	『鉄道員(ぽっぽや)』『居酒屋兆治』
増村保造	法学部・文学部	『清作の妻』『大地の子守唄』
松本准平	工学部・工学系研究科	『パーフェクト・レボリューション』『最後の命』
山田洋次	法学部	『男はつらいよ』『幸福の黄色いハンカチ』
吉田喜重	文学部	『人間の約束』『ろくでなし』

※印の監督は文学部ウェブサイトで
インタビュー記事が読めます

映画館としての東大

キャンパスではよく上映会が行われています。2021年8月には『曲面の秘密』(→p25)の上映会がありました(グローバルキャンパス推進本部)。2月には『ナディアの誓い』(アレクサンドリア・ボンバッハ監督)、1月には『日本人の忘れもの』(小原浩靖監督)、2020年11月には『女を修理する男』(→p21)の上映会が(日本・アジアに関する教育研究ネットワーク=ASNET)。9月には『バベルの学校』(ジュリー・ベルトゥチェリ監督/ピアサポートルーム)、2月には『女らしさ』(マレク・シャフィ監督/ASNET)、1月には『37セカンズ』(HIKARI監督/先端研福島研究室)。2019年12月には『目を閉じれば見える』(エゴール・サリニコフ監督/文学部スラヴ・現代文芸論研究室)、9月には『愛がなんだ』(今泉力哉監督/先端研熊谷研究室)。2018年12月にはH29年度総長賞受賞のディペシュ・カレルさんが監督した『A Kali Temple Inside Out』(多文化共生・統合人間学プログラム)、5月には『ゲッベルスと私』(クリスティアン・クレーネス監督/ドイツ・ヨーロッパ研究センター)や『英国王のスピーチ』(トム・フーパー監督/柏図書館友の会)、3月には東大出身の松本准平さんが監督した『パーフェクト・レボリューション』(先端研福島研究室)、2月には『みんなの学校』(真鍋俊永監督/バリアフリー教育開発研究センター)が。上映会には関係者の講演が付くことも多々。まめにウェブで開催情報を確認すれば東大が映画館になるかも!?

UTokyo映画トピックス

中村栄一特別教授が主演を務めた『分子の音色』

世界の有機化学を先導してきた中村栄一先生の趣味はバロックフルート。中学・高校時代の同級生で古典楽器演奏家として活躍する渡邊順生さんとともに、2020年8月、古稀の記念に蓼科の音楽堂でコンサートを行いました。その記録を担当した杉本信昭監督は、そこにインタビューと関係者の証言、二人が過ごした母校の映像、シシド・カフカさんのナレーションも加えてドキュメンタリー作品へと昇華。54分の映像と音楽から、好きなことを追求してきた二人ならではの人生がにじみ出ます。「お二人の生き方にもこの映画そのものにも、たたずまいとしか呼べない在り方を感じます」とは谷川俊太郎さんがパンフレットに寄せた言葉。劇場情報は公式サイトで確認できます(下北沢トリウッドでの上映は3月25日まで)。https://bunshi-no-neiro.com

©MONTAGE INC 2021

先端研の教職員が企画·製作·出演した『もうろうをいきる』

目が見えず耳が聞こえない盲聾の人たちを全国各地に訪ね、彼らの日常と周囲の支援者たちとの関係性を映し出した91分のドキュメンタリー作品(2017年、西原孝至監督)。本作の企画・製作を務めた一人が、先端科学技術研究センターの大河内直之特任研究員です。大河内さんは、盲聾者の支援技術に関する研究や、映画のバリアフリー化を進める活動に従事してきた全盲の研究者。スマートフォンなどの端末を使って音声ガイドや字幕を提供するアプリ「UDCast」の開発でも知られています。大河内さんが在籍する研究室を率いる福島智教授もインタビューイの一人として出演している本作。映画の公式サイトでは自主上映会の申し込みも受け付けています。http://mourouwoikiru.com

東大の研究者12人が

自分の学術の観点から お薦めする映画作品集

DVDや動画配信サービスの普及により、映画へのアクセスは昔より格段に簡単になりました。
しかし、選択肢が多すぎて迷ってしまう人も少なくないのでは……?
そこで、東大の様々な分野の研究者12人に、各々の専門分野の観点からお薦めする作品を紹介してもらいました。
鑑賞の手引きとしてご覧いただき、各々の研究者が進める学術への興味を高めるきっかけともしてくだされば幸いです。

©TBSテレビ

2021年　監督：立山芽以子　語り：常盤貴子　劇場：新宿シネマカリテ、ヒューマントラストシネマ渋谷ほか　http://mukwege-movie.arc-films.co.jp/

紛争鉱物研究者

お薦めの一本

華井和代
未来ビジョン研究センター講師
HANAI Kazuyo

『ムクウェゲ
「女性にとって世界最悪の場所」で闘う医師』

ノーベル平和賞受賞者の性暴力との闘いと日本のつながり

3月4日から全国で順次劇場公開されている本作は、2018年にノーベル平和賞を受賞したデニ・ムクウェゲ医師の活動やその背景を追った素晴らしいドキュメンタリー映画です。2021年に第21回石橋湛山記念早稲田ジャーナリズム大賞を受賞しました。

コンゴ紛争が勃発してから20年以上経った今でも武装勢力と国軍による住民への暴力が継続するコンゴ東部では、多くの女性たちが文字通り肉体的に壊され、家族やコミュニティからは見放されるという悲劇が起きています。そのコンゴ東部に設立したパンジ病院で、ムクウェゲ医師はこれまで5万人以上の性暴力被害者を無償で治療し、彼女たちの社会復帰に尽力してきました。

この悲劇の背景にあるのが、私が研究している紛争鉱物です。世界有数の鉱物産出地域であるコンゴ東部では、武装勢力や国軍部隊が鉱山周辺地域を実効支配し、タンタルや金などの鉱物を活動の資金源にしています。地域住民を支配する手段として彼らが組織的に行っているのが性暴力。そしてその鉱物を使っているのが、私たちのような先進国の人間です。スマホやパソコンなどの電子機器に使われている鉱物は紛争の資金源になり、性暴力につながっているのです。映画はそういった日本へのつながりも描き、日本の高校生がこの問題を学ぶ姿も映しています。

立山芽以子監督は、コンゴ東部を訪れ、性暴力の被害者だけではなく、加害兵士にもインタヴューしています。この兵士は、10代の時に自分の村が襲撃され、殺されるか武装勢力に入るかの二択だったと打ち明け、性暴力は上司の命令に従って仲間であると証明する行為だったとも話しています。彼は有罪判決を受けて刑務所に入りましたが、親族が集めたお金で出所しました。現在は家庭を持つ彼が、もし戻れるのであれば学校に行きたい、と話していることがこの問題の難しさの一面を浮き彫りにしています。

日本からとても遠い地域で起きている悲惨な問題はともすると思考停止したくなるかもしれませんが、本作は私たちにも「できることがある」ということを描いています。例えば、募金をする、学ぶなど、諦めずにそれぞれの立場で自分にできることを探すきっかけになればと願っています。

その他のおすすめ

『女を修理する男』
2015年、ティエリー・ミシェル監督。ムクウェゲ医師の活動を描く。「紛争下の性暴力の実態と女性たちの生きる力に衝撃を受けました」

地球物理学者

お薦めの一本

『日本沈没』

©1973 TOHO CO., LTD.

1973年　監督：森谷司郎　出演：小林桂樹、藤岡弘、いしだあゆみ
日本沈没〈東宝DVD名作セレクション〉
DVD 2,700円（税込）　発売・販売元：東宝
動画配信：Amazonなど

木下正高
地震研究所教授
KINOSHITA Masataka

地震学への関心を高める優れた思考実験

本作を観たのは中学の頃です。小松左京の原作も読み、青雲の志が滾りました。地球物理学を知ったのは大学に入ってから。私の師匠の上田誠也先生はプレートテクトニクスの第一人者で、日本で地震が多い原因はこれか、と沸き立ったのを思い出します。06年版は掘削船「ちきゅう」の航海中に船上で観ました。核爆弾を地中に埋め、プレートをちぎって沈没を防ぐという話で、主人公と「ちきゅう」が大活躍。21年のTV版は『シン・ゴジラ』的でしたね。総理役でいうと73年版の丹波哲郎が一番魅力的でした。

3作では沈没のメカニズムが違います。73年版ではマントル対流。対流の形が変わることで沈み込む場所が移るというチャンドラセカール説が下敷きです。06年版では地殻下部が分離して地球内部へ落ちる「デラミネーション」が鍵。21年版のキーワードは、地球温暖化と、プレート同士の結合が緩んでごくゆっくりずれる「スロースリップ」です。実はこの現象を約20年前に発見したのが地震研の小原一成先生。非常にゆっくり滑る地震なので普通の地震計ではわかりません。日本の優れた観測網あっての成果でした。近年は世界で観測が進み、巨大地震発生のヒントと目されます。映画が学問の時代ごとの進化を映しています。専門的には、スロースリップは「スロー地震」と総称される現象の一つですが、作品のおかげでスロースリップは広く知られました。地震研究にとって重要な作品です。

日本列島沈没は科学的にはありえないですが、そこを割り切れるのが映画の醍醐味。『日本沈没』は優れた思考実験です。日本人のアイデンティティが脅かされた際にどうするかが、一市民として面白い。災害や災害後の対策会議の表現も進化しています。20年後に最新版ができたらまた新しい知見が入るでしょう。海底ケーブルの光ファイバー網が発展し、地殻変動でわずかに伸び縮みするファイバーの歪みを計測できるようになりつつあります。これを使えば地震計を設置せずにスロースリップを検知できるかも。ケーブル自体をセンサーにする発想です。天気予報のような地殻変動予報が登場して……そんな想像も促す名作です。

現代中国研究者

お薦めの一本

『デニス・ホー ビカミング・ザ・ソング』

2020年　監督：スー・ウィリアムズ　配給：太泰　自主上映会の問い合わせ：Tel 03-5367-6073　3月18日にオンライン上映あり。
→www.facebook.com/kyudaitaiwan/

阿古智子
総合文化研究科教授
AKO Tomoko

激動する香港とスター歌手の自由を求める闘い

香港ポップス界のスター、デニス・ホーの音楽活動と激動する香港の状況を映し出すドキュメンタリー映画です。子供の頃にカナダで教育を受け、香港に戻って憧れのアニタ・ムイに師事し、歌手として活躍してきた彼女は、中国返還後の香港で民主化を訴えるようになっていきます。2014年の普通選挙を求めた「雨傘運動」では若者と一緒に座り込み、2019年には犯罪容疑者を中国に引き渡すことを可能にする「逃亡犯条例」改正案に反対する大規模デモにも参加しました。

アーティストは「色」がつくと、CMなどの仕事にも影響が出る可能性があるため、日本では積極的に政治的活動をしないと思いますが、彼女は街頭に出て声を上げ、国連人権理事会やアメリカの議会でも演説をし、香港の現状を訴えました。一市民として様々なことに関わり、意見を言う権利があることを間接的に歌の中でも表現しています。中国大陸でも人気があったデニス・ホーですが、社会活動をすることでその市場を失いました。巨大マーケットである中国と正常にビジネスが行えなくなる打撃は非常に大きいため、ハリウッド映画なども作風を変えたり、シーンを削ったりといったことを余儀なくされているなか、自分たちの表現をし続けている人たちがいます。彼女はその代表格です。

©AquarianWorks,LLC

映画で流れる彼女の音楽は素晴らしく、発する言葉はとても力強く、そしてとにかくかっこいい。デニス・ホーの葛藤やさまざまな人との関わりを通して、香港の歴史、今の動いている香港を理解できます。しかし、2020年6月には、国家安全維持法が施行され、2021年12月にはネットメディアの役員として彼女も逮捕されました（保釈は認められた）。

昨年9月、香港で開催予定だったデニス・ホーのコンサートは直前に会場予約が取り消されました。しかし彼女は諦めなかった。厳戒態勢の中オンラインでライブ配信し、涙を流しながら歌う姿を見て私も深く心を動かされました。

政治は私たちの生活のとても細かいところにも関わっていて、全く関係しないわけにはいきません。彼女の姿を通して、緊迫する状況になったとき「人としてどうありたいか」ということも問いかけてくる力強い作品です。

国際政治学者 お薦めの一本

『博士の異常な愛情』

藤原帰一
法学政治学研究科教授
FUJIWARA Kiichi

©1963, renewed 1991 Columbia Pictures Industries, Inc. All Rights Reserved.

1963年　監督：スタンリー・キューブリック　出演：ピーター・セラーズ、スターリング・ヘイドン　Blu-ray 2,619円（税込）
発売・販売元：ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント　動画配信：Amazon、U-NEXTなど

ブラックユーモアで捉えた米ソの核開発競争

国際政治学の議論というのは得てして抽象的になりがちで、掬いきれない部分がどうしても残ります。たとえば、アフガニスタン紛争の際に様々な議論がありましたが、市井のアメリカ人がどう受け止めているのか、なぜ紛争に賛成するのかなど、わからないことばかりでした。最近なら米中の対立を見て「中国政府が」とか「習近平体制が」などと言って考えますが、それでは中国に暮らす人から世界がどう見えているのかはわかりません。相手の社会を知らずに決めつけるのは危険ですが、これは国際政治学では手が届かない部分です。その点、映画は違う。フォーマルな理論とは違う引いた視点から捉えることで見えてくる社会の姿というものがある。そんな思いを胸に映画を観てきました。

アメリカの戦争はどう語られてきたのか。これが私にとっては重要なテーマであり続けています。アメリカで武力を用いた物語といえば西部劇ですが、たとえば『駅馬車』が描き出す時代は、決して戦争に肯定的ではありませんでした。第一次世界大戦期には、欧州が舞台の戦争に参加すべきなのかという疑問が広がります。『西部戦線異状なし』は、ドイツの若者が戦場で死ぬ物語。描かれたのは、悪者としてのドイツではなく避けるべき悲劇としての戦争でした。

映画は政治学の手が届かぬ部分に迫れる

それが一転するのが第二次世界大戦です。『カサブランカ』に現れるドイツ人は明らかに悪者でした。アメリカが戦争で世界を安全にし、民主主義という望ましい仕組みを広める、という考え方が根底に見えます。そしてこれがアメリカの正統な戦争認識になりました。映画は社会通念の変転を如実に映し出しています。

一方で、映画にはそれと違う重要な働きもあります。そのことがよく表れているのが『博士の異常な愛情』です。まだ30代のスタンリー・キューブリック監督が米ソの冷戦と核兵器競争を辛辣に風刺した名作です。

精神に異常をきたした米軍の基地司令官が、自分だけの判断で爆撃機によるソ連への核攻撃を命令します。核戦争を避けたい大統領は、爆撃の直前、ソ連の首相に電話するのですが、時候の挨拶から始まる二人のトークが非常に印象的で、私はいまも暗唱できます。結局、爆撃機は呼び戻せず、核爆弾が投下されるのですが……。

題名につながるStrangeloveという変わった名の博士は、核兵器の専門家としてアメリカに帰化したドイツ人で、V2ロケット開発のフォン・ブラウンを思わせます。車椅子に乗っていて右手も不自由ですが、核爆弾投下後の世界を話し始めると、途端に元気になってナチス式敬礼を決め、歩き出します。そして、キノコ雲が花火のように次々と上がる恐ろしくも美しい映像の後ろに流れるのは“We'll meet again”と歌う優雅なジャズナンバー。ブラックユーモアに溢れた映画史に残るラストです。

当時、冷戦下で核戦争への懸念が確かにあり、それを前提とした作品ではあります。でも、監督は少し引いて見ている。ここには正義の戦争を行うアメリカは微塵も存在せず、馬鹿なことをやるんじゃないぞという意図が見えます。対象を突き放して作り手が独自の表現をする、映画というものの力を感じさせる一作です。

その他のおすすめ

『罪の手ざわり』
2013年、ジャ・ジャンクー監督。４人の罪人の物語を通して、社会の不正に反発しながらそれを表現できない人々のフラストレーションを任侠スタイルで描く（中国では未公開）。

『アウトポスト』
2020年、ロッド・ルーリー監督。アフガニスタン紛争で最も過酷だったとされる米軍前哨基地とタリバンの戦闘を描く（実話が元）。これも一歩引いた視点で作られた一作。

『存在のない子供たち』
2018年、ナディーン・ラバキー監督。貧民街に住むシリア難民の12歳の少年が、妹を売ろうとする親に反発して家出し、親を告発する。シリア難民の少年が主人公を演じている。

流体工学者 お薦めの一本

『アポロ13』

大島まり
生産技術研究所教授
OSHIMA Marie

©1995 Universal Studios. All Rights Reserved.

1995年　監督：ロン・ハワード　出演：トム・ハンクス、ケヴィン・ベーコン　DVD: 1,572 円 (税込)　発売元: NBCユニバーサル・エンターテイメント　動画配信：Amazon、U-NEXTなど

奇跡の帰還を生んだ工学者魂とチームワーク

研究をがんばりたいときに繰り返し観た一本

マサチューセッツ工科大学（MIT）への留学から帰国して、博士号を取得後、生産技術研究所の助手となり、学会のために渡米した際に観たのが、『アポロ13』でした。MIT時代の研究者仲間とスタンフォード大学の近くのシネコンに行ったんです。30代半ばで観たせいかもしれませんが、感動しただけでなく考えさせられる映画でした。

人類にとって３回目の月面着陸を目指して旅立ったアポロ13号が、月に迫ったところで爆発事故を起こします。酸素が流出し、大半の電力を失った13号は、月面を間近に捉えながらやむなく着陸を断念し、地球への帰還が唯一の目標となります。大気圏再突入に必要な電力と誘導プログラムを保持するため、司令船を閉鎖して小さな月着陸船に移り、暖房も切らざるを得ない状況に追い込まれた３人の宇宙飛行士。さらに船内の二酸化炭素濃度が上昇して死の恐怖が迫り……。

極限状態で与えられた課題を解かねばならない状況は、それまでの自分の研究人生にはありませんでした。必要なものがなければ調達すればよいという感覚があったのです。しかし、３人が使えるのは船内にあるものだけ。そこで工夫して課題を解決しなければ、待っているのは死。この設定は目から鱗でした。与えられた条件下で最大の仕事をするのが真のエンジニアだと気づかされ、材料も空間も時間も限られた状況で命を左右する課題に立ち向かう姿に心を打たれました。

アポロ13号は見事に帰還を果たし、「輝かしい失敗」と呼ばれます。これは平時からNASAが様々な状況を想定して訓練と経験を積み重ねてきたからこそ成し遂げられたことでした。研究者にも通じる教訓でしょう。宇宙にいる３人と地上の管制スタッフのチームワークも特筆すべき要素でした。象徴的なのは、エド・ハリス演じる管制官が発した“Failure is not an option”という言葉です。仲間を熱く鼓舞する一方で彼は冷静な検討も続けていました。典型的なアメリカのリーダーシップの表現ではありますが、やはりガツンときます。無事に帰還させることを目指して管制スタッフが一致団結し、飛行士は仲間を信じて行動する。このチームワークも平常時から培っていたからこその賜物でしょう。目的を共有して困難をクリアするなど非常時に急にやろうとしてもできないことです。

私は小学生の頃にアポロ11号の月面着陸を見て、宇宙飛行士になりたいと思いました。早々に諦めましたが、宇宙飛行士を送り出す側になりたくて工学の道を選んだんです。現実世界での活きたサイエンスやテクノロジーとは何か。それらを身につけ、必要なときに発揮するにはどうしたらよいのか。『アポロ13』はエンジニアの原点を教えてくれた映画です。研究生活を送るなかでがんばらないといけないと思った際に再生して観てきました。特に３人が二酸化炭素除去装置を組み立てる場面や管制塔とのやりとりはいつ観ても感激します。今後も何度か観ることになりそうでです。

その他のおすすめ

『ビューティフル･マインド』
2001年、ロン・ハワード監督。ノーベル賞受賞の経済学者ジョン・ナッシュの半生を描く。「統合失調症に苦しむ天才を支援する大学の懐の深さに大学人として感じ入ります」

『奇蹟がくれた数式』
2016年、マシュー・ブラウン監督。インド人の天才数学者ラマヌジャンの半生を描く。「人種や宗教の違いと差別など、Diversity & Inclusionのあり方も考えさせられます」

『ミクロの決死圏』
1966年、リチャード・フライシャー監督。縮小された科学者らが人間の体内に入る冒険SF。「ミクロの世界や人体への興味を持った原点。血管内の血球の描写が印象的でした」

数学者 お薦めの一本

『曲面の秘密 ―マリアムの魔法の杖』

2020年　監督：George Csicsery　動画配信：Vimeo http://www.zalafilms.com/secrets/index_jp.html

伊藤由佳理
カブリ数物連携宇宙研究機構 教授
ITO Yukari

フィールズ賞受賞者ミルザハニが創造した数学とその軌跡

数学のノーベル賞と称されるフィールズ賞を受賞した唯一の女性、イラン人のマリアム・ミルザハニをフィーチャーしたドキュメンタリー映画です。ジョン・ナッシュ、ラマヌジャンやチューリングといった実在した数学者についての映画は他にもありますが、特殊な能力を持つがゆえに私生活では変人として描かれることが多い中、マリアムは「普通」に生活し、純粋に数学が好きで、結婚して子供がいる。彼女のような数学者もいるということを知ってほしいです。

高校生のときに数学オリンピックで金メダルを取り、ハーバード大学大学院に進み研究者になった彼女の影響は多大で、イランではマリアムに憧れて数学を学ぶ女性が増えたそうです。「女性だからできない」ことなんてないという意識が強く、ダイバーシティやジェンダーの観点で見てもいい映画です。

特に中高生に見てもらいたいのが、高校生の彼女が数学を解く際、必ず何通りかの方法で解いたというくだりです。数学の研究として「別証明を付ける」という方法もあるんです。一つ証明ができたら終わりではなく、さまざまなアプローチを見せるのも数学の業績です。参考書の解答と解説を見て暗記するのではなく、いろいろな考え方ができ、答えにたどり着くまでの過程を考えるのが数学の面白さ。子供の頃は小説家になりたかったというマリアムですが、小説を書くように数学のストーリーを考えていくのが楽しいと話していていいなと思いました。

2017年７月に乳がんのため40歳で亡くなりましたが、毎年彼女の誕生日である５月12日には世界中で女性の数学者をエンカレッジするイベントが開かれています。女性数学者は依然少なく、つながる場を作ることが大事です。アメリカやヨーロッパのように、アジア・オセアニア地域でも女性数学者の団体を立ち上げようという構想があります。日本でも来年度、女性数学者が集まる研究会を開催します。この作品を通して、数学界を目指す女性が増えたらいいなと願っています。

©Photo of Maryam Mirzakhani by Jan Vondrak

科学論研究者 お薦めの一本

『2001年宇宙の旅』

1968年　監督：スタンリー・キューブリック　出演：キア・デュリア、ゲイリー・ロックウッド　DVD 1,572円(税込)　発売元：ワーナー・ブラザース ホームエンターテイメント　販売元：NBCユニバーサル・エンターテイメント　動画配信：Amazon、U-NEXTなど

佐倉 統
情報学環 教授
SAKURA Osamu

進化する科学技術との向き合い方を探索する

『2001年宇宙の旅』は、機械と人間の関係について考えさせられる名作です。冒頭で延々と猿人の場面が続きますが、黒い物体「モノリス」に触れて、攻撃性を覚えたことによってヒトに進化したことを表しています。その猿人が放り上げた骨が、パッと一瞬で数百万年後の人工衛星に切り替わる。名シーンです。その後、モノリス探査のため、完全無欠のコンピューター「HAL9000」が制御する宇宙船が木星に向かいますが、その途上でHALが反乱を起こします。なぜなのか。「モノリス」とは何なのか。二つの謎解きがあります。

©1968 Warner Bros. Entertainment Inc.
All Rights Reserved.

今まさに人工知能やロボットなどとどう付き合っていくのか、ということが話題になっていますが、それを先取りした映画だと言えます。技術はどんどん進化していますが、生き物としての人間、脳や心臓などは変わりません。インターネットの普及で膨大な情報に日々接することが人間にとってありがたいことなのか。耐えられることなのか。実はきちんと検証されていません。何でもかんでも技術によって「できる」からOK、ではないというのが私の立場で、本作はそれを象徴しています。

科学的にも正確に作られていて、宇宙での爆発は真空なので無音です。それが不気味さをさらに煽ります。細かいところまで計算されていて、どのシーンも無駄がありません。印象的なのが、乗組員がHALに聞かれないように、船外活動用のポッドの中に入って会話をする場面。HALはポッドの窓から唇の動きを読み取り、会話の内容を理解します。背筋が凍りました。また、生き残った乗組員がHALのメモリのようなものを一つ一つ抜いていく場面では、HALの歌声がだんだんおかしくなり、呂律が回らなくなっていく。コンピューターは生き物なのでは、と考えさせられます。

もう１本、機械と人間の関係を考えるうえで外せないのが、押井守監督の『GHOST IN THE SHELL /攻殻機動隊』です。サイボーグから成る特殊部隊がネットの中の犯罪に立ち向かう、1995年に公開されたアニメ映画で、現在、そしてもっと先までの状況を見越しているような、「2001年」と同様に考えさせられる、非常にインパクトのある一作です。

『メッセージ』

進化生態学者

お薦めの一本

深野祐也
農学生命科学研究科助教
FUKANO Yuya

宇宙人の言語から垣間見える進化の軌跡

私のお薦めは、2017年に劇場公開されたSF映画『メッセージ』です。世界各地に現れた宇宙船の飛来目的を探るため、米軍から依頼を受けた一人の言語学者が宇宙人と意思の疎通を図ろうとする本作。テッド・チャンの「あなたの人生の物語」というSF小説が原作の、ハードSFと呼ばれる、現実の科学ルールに基づいてきちんと描こうとしている作品です。

登場する宇宙人が言語として使うのが図像。円形文字を描きメッセージを伝えます。思考も時系列ではなく、同時的に理解します。つまり我々のように時間が流れるのではなく、過去も将来もワンセットで分かるような生き物として描かれています。生き物の性質を観察し、「なぜそうなっているのか」を考える進化生態学という学問を研究する私にとって興味深いのは、どのような文化や環境で生きてきた生き物だったら、そのような思考や言語を進化させるのかという点です。「なぜそのように進化したのか」と考えるときに用いるのが、理論に基づき数学を用いて予測する方法と「生き物の気持ちになって考える」という私がよく使うアプローチです。分かりやすい例が雌雄同体、そして風媒花（風で花粉を散布する）のトウモロコシ。花粉をなるべくたくさん飛ばすために雄は高い所で花粉を作りたい。一方、雌は低い位置で花粉をキャッチしたいという対立が起こります。一つの解決策として雄花と雌花が分かれ、上の方に雄花が、下の方に雌花があります。

このような考え方をする進化生態学者からみて、なるほどと思えたのが、宇宙人がタコのような姿で目が全面についていた点です。これなら前後の概念がなく、常にワンセットで考えるような思考方法が進化していても不思議ではないと思えました。

そしてもう１点。英国の進化生物学者のリチャード・ドーキンスが、他の惑星で人間とコミュニケーションできるくらい複雑な生き物がいるとすれば、それは自然選択によって進化したはずだと言っています。自然選択を発見したか、という点は宇宙人の知性の発達度合いを図る際に重要な基準になるはずなので、異星人と意思疎通を図る専門家チームの中に進化生態学者を入れるべきだと思っています。そのような事態があればぜひ私を呼んでください。

©2016 Xenolinguistics, LLC. All Rights Reserved.

2017年　監督：ドゥニ・ヴィルヌーヴ　出演：エイミー・ アダムス、 ジェレミー・ レナー　Blu-ray 2,619円（税込）　発売・販売元：ソニー・ピクチャーズ エンタテインメント　動画配信：Amazon、U-NEXTなど

素粒子物理学者

お薦めの一本

大栗博司
カブリ数物連携宇宙研究機構長
OOGURI Hirosi

科学の手法と醍醐味を伝える異星人交流譚

SFではよくある異星人遭遇ものですが、派手な戦闘シーンで魅せる作品ではなく、言語学者のバンクス博士が異星人の言語を理解しようと奮闘する話です。私は公開時に米国で観て、科学者が自然を理解しようとする際の試行錯誤がうまく表現されていると思いました。

ノーベル物理賞を受賞した朝永振一郎博士は、不思議だと思うことと観察することと謎が解けることを、科学の芽と茎と花に喩えました。バンクス博士のアプローチはまさにこれです。音や行動のどれが言葉かもわからない状態から対象をよく観察し、考えて謎を解く。異星人の言語の習得プロセスから科学の一つのモデルが立ち現れています。抑制の効いた主演の演技が効果的で、自分がやらなきゃという使命感と困難な挑戦に夢中になる様子が如実に伝わります。このままでは交流が進まないと思った博士が防護服を脱いで危険を顧みず異星人に近寄る場面は特に印象的でした。

劇中にも出てきますが、サピア＝ウォーフの仮説というものがあります。思考はそれに使われる言語の影響を受けるという説で、言語学の世界では異論もあるそうです。でも、外国語を学んで考え方が広がるように感じることは確かにありますよね。バンクス博士も異星人の言語を習得する過程で世界の見方が変わっていきます。言語を学ぶことで思考が影響を受け、異星人の考え方に近づく。非常に面白いモチーフです。

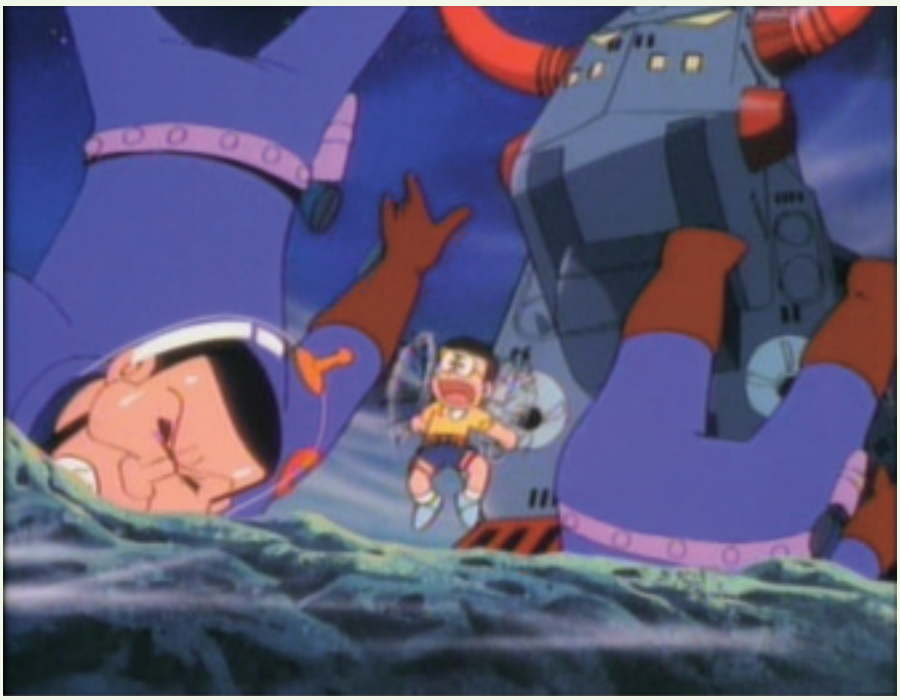
もう一つ重要なのは、バンクス博士とともに異星人と接触する理論物理学者の存在と「フェルマーの原理」です。たとえば水中に入って屈折して進む光は所用時間が最短となる経路を取るということですが、これがストーリーにおいて大きな意味を持ちます。人間の言語や考え方は原因があって結果があるという因果律を前提にしています。しかし異星人の言語や考え方はおそらくフェルマーの原理に基づきます。つまり、時間は一次元的に直進するものではない。人は過去を思い出せても未来は思い出せません。これは実は不思議で、物理法則に依るなら基本的に過去と未来は対称のはずなのです。言葉で説明すると難しい話ですが、映画はその点もうまく表現しています。

様々な側面から科学者を強く刺激する一作です。

身体情報学者 お薦めの一本

『ドラえもん のび太の宇宙開拓史』

稲見昌彦
先端科学技術研究センター 教授
INAMI Masahiko



©藤子プロ・小学館・テレビ朝日 1981

1981年　監督：西牧秀夫　声の出演：大山のぶ代、小原乃梨子　DVD 2,200円（税込）　発売元：小学館　販売元：ポニーキャニオン

能力は己よりむしろ環境の変化で拡張する

子どもの頃、スポーツが苦手でした。野球で打席に立つと守備陣が一斉に前に移動する「稲見シフト」を敷かれたりして。「サイボーグ009」の跳躍力に憧れて木から飛び降りる練習に励み、転んで腕を骨折したこともあり、身体を鍛えるのは自分には向かないと思うようになりました。そんな頃に家族で亀有の映画館に行って観たのがドラえもん長編映画の第二作となる本作です。意地悪なジャイアンが映画では優しいというパターンが定着したのは本作からではないでしょうか。

あるとき、のび太の部屋がコーヤコーヤ星という文明のある惑星と超空間で繋がり、行き来ができるようになります。この星は重力が非常に小さいため、地球の重力に慣れた人が行けば自ずと高い身体能力が発揮できる。地球では弱くてパッとしないのび太も、そこではスーパーマンのような大活躍を見せます。腕を少し回しただけで当地の悪者たちが簡単に吹っ飛んでいく。その様子を見て、こうした環境を人工的につくればスポーツが苦手な自分でも活躍できるぞ、と子供心に思い、テンションが上がりました。武田鉄矢さん作詞の主題歌が入ったサントラも買ったし、テレビ放映時にももちろん観ました。

地球と違う環境で活躍するのび太に見た希望

ポイントは、能力も力の一種であり、相互作用であることです。能力は自分のなかにあると思いがちですが、そうではなく、自分と社会、自分と環境の相互作用のなかにこそあります。たとえば、サッカーが苦手な人が野球では活躍するとか、職場で燻っていた人が異動して活躍するとか、内気な人が英語で話すと活発になるとか……。そうしたことを考えるきっかけとなり、研究者として人間拡張工学を進める原点となった作品です。

私がひみつ道具で最強と思うのは「もしもボックス」です。あれはまさにVR装置。昔からあんな道具を作りたかったというよりは、ドラえもん的な存在が現れることを願い、少なくとも未来の子孫が自分を助けに来ないはずはない、と10歳頃まで本気で信じていました。夏休みの宿題が終わらず、机の引き出しを覗いたこともあります。高学年になると、未来でもタイムマシンが発明されていないか、あったとしても過去に干渉しないルールなのだと考え、それなら自分でひみつ道具を作ればいいかと思うようになりました。

研究者になって、ドラえもんの透明マントのような光学迷彩の技術を開発しました。VR空間での活躍を現実世界に近づける一手として、時間の進み方が現実より遅いけん玉トレーニングのVRサービスを開発し、すでに1000人以上の利用者が通常より簡単に新技を習得しています。中学生の頃、ロス五輪の開会式で人がジェットパックで空を飛ぶのを見て、タケコプターそのものだと衝撃を受けました。近年はドローンバイクの開発も進みますが、操作が難しくて限られた人でないと飛べず、誰もが自由に飛ぶ状況には至りません。のび太に親近感を感じてきた研究者としてのアイデアを活かしたいと思っています。

その他のおすすめ

『GHOST IN THE SHELL / 攻殻機動隊』
1995年、押井守監督。「研究室の助手の先生に参考文献として勧められ、博士論文のヒントに。数年後、立体映像の研究中に作品との繋がりに気づき、光学迷彩の技術に結実しました」

『アバター』
2009年、ジェームズ・キャメロン監督。「変身した世界での様子を巧妙に立体映像化。アバター視点での両目の距離表現に合点がいく。人間拡張系の理論に理解がある監督だと思う」

『君の名は。』
2016年、新海誠監督。「『転校生』（大林宣彦監督）の世界を美しく現代化。身体が変わると心も変わる。他者理解には変身が肝だと示し、VR研究の可能性も垣間見せてくれた一作」

ロシア史研究者

お薦めの一本

『太陽の墓場』

破局から立ち上がる 創造の力がヒロインに現出

1960年　監督：大島渚　出演：津川雅彦、炎加世子、佐々木功
DVD 3,080円（税込）
発売元・販売元：松竹
動画配信：Amazon、U-NEXTなど

©1960 松竹株式会社

池田嘉郎／文
人文社会系研究科 准教授
IKEDA Yoshiro

歴史研究者が論文を書くことと映画監督が作品を創ることは似ています。どちらも関係の網の目からなる世界の全体を、部分を組み合わせることで再構築するのです。部分というのは史料であり、フィルムです。人物の配置、場面のつなぎ、物語の展開、これらは部分の組み立ての如何によって、結局世界を見る目の力によって決まります。立ち上がる作品世界はいずれも虚構ですが、部分を組み直す力によって虚構のリアリズムも決まります。私はこの認識を、山際永三監督の作品、および彼の映画批評を学ぶことで手に入れました。いま、自分の専門であるロシア史研究とは別に、山際研究に取り組んでいる最中ですが、これまでの成果は「山際永三『狂熱の果て』とリアリズムの探求」「山際永三『炎1960〜1970』と映画運動」として東大文学部の『文化交流研究』に発表しました（インターネット上で読めます）。

その山際の盟友であり、同じような情熱をもって世界の再創造に取り組んだのが大島渚です。『愛と希望の街』（1959年）は破局の予感が破局へと落着し、『青春残酷物語』（1960年）は破局のエネルギーを全編追い、そして『太陽の墓場』（1960年）にいたって破局の中から立ち上がる創造的な力がヒロイン炎加世子の姿に現出します。大阪のドヤ街の二人のやくざ、ほとんど擬似恋愛の関係にある津川雅彦と佐々木功は、彼女の肢体に衝突して崩壊します。「血液銀行」「戸籍売買」という日本の生々しい現実が、ドヤ街の住人を翻弄します。その中でひとり炎加世子は地母神のように立ち、人を殺し、揺らぐことなく生き続けます。彼女の勇猛な姿はフェリーニ『8 1/2』（1963年）の地母神サラギーナを先取りするようです。『青春残酷物語』の主人公たちの破滅に対して、そのさらに先に行くにはどうすればよいのか。この問いに賭けてつくられたのが山際永三『狂熱の果て』（1961年）です。絶望の先に広がる魂の荒野をさすらうヒロイン星輝美の小さな姿と、『太陽の墓場』における炎加世子の疾駆する躰とは、1960年前後に噴出した叩きつける創造力をフィルムにとらえたもので、60年後の今日も剝き出しの荒々しさでぶつかってきます。

分子遺伝学者

お薦めの一本

『竜とそばかすの姫』

疾患科学が目指す デジタルツインの姿を示唆

2021年　監督：細田守　声の出演：中村佳穂、成田凌、染谷将太、玉城ティナ、幾田りら
DVDスタンダード・エディション 4,180円（税込）　発売元・販売元：バップ

©スタジオ地図 2021

村上善則
医科学研究所教授
MURAKAMI Yoshinori

私はがんの研究を進めてきましたが、近年、DNA等の生体情報に経時的臨床情報を加えた多数の症例を横断的に研究する意義に目覚めました。将来の個別疾患予防に役立てる次世代コホートの構築に加わり、科学技術振興機構のデジタルツイン（DT）プロジェクトに採択されて情報企業と共同で取り組んでます。DTはリアル空間の情報をITで集めてサイバー空間に再現します。たとえば学生に慕われる教師がいたら、その情報を抽出してDT教師を再現し、教育に携わってもらおうというわけです。個人情報から疾患予測プログラムを開発する計画もありますが、思い描くDTとはまだまだ開きがあります。

そんな折、家族の薦めで観に行ったのが本作でした。主人公は高知の高校生、すず。イヤホンとスマホを経由して抽出されたすずの生体情報をもとに仮想空間「U」に現れたベルは、音楽の才能を遺憾なく発揮して人気者になります。突如現れた竜が大暴れしてUを攪乱し、皆から疎んじられるなか、ベルだけは竜に歩み寄ろうとして……。

初めてUにベルが現れるシーンが非常に印象的でした。目指すDTの姿はこれかもと思い、自分の想像を超えた少し先の未来を見たように感じました。ストーリーの決め手は、仮想空間での匿名性を捨てることでした。匿名のままで人間同士の信頼感や愛情を深めるのはやはり難しいと思います。匿名性はコホート研究でも非常に重要ですが、それを研究以外の価値に繋げるには、最終的に個人へのフィードバックが必要となります。Uと現実世界との連動ぶりも示唆的でした。すずの顔にあるそばかすはベルにもあり、すずが元気を失うとベルも歌わなくなります。本人が老いればDTのほうも老いてくれないと、健康寿命の予測なんてとてもできないでしょう。

イヤホン経由で生体情報を抽出するなど無理だという声も聞きます。たとえば血液の酸素飽和度を知るには、昔は採血して酸素分圧を測る必要がありましたが、いまはパルスオキシメーターを指にはめればOK。日本企業が発明した現代の必需品です。こうしたいくつかのブレイクスルーがこの描写をも現実にするかもしれません。本作を観た若い人たちが疾患科学の夢＋悩み=魅力にも思いを馳せてくれることを願います。

キャンパス散歩 第39回

日本陸軍の滑走路だった地に広がる情報とスパコンと産学連携の柏Ⅱキャンパス

大林由尚
情報基盤センター広報担当
https://www.itc.u-tokyo.ac.jp

柏Ⅱキャンパスのある一帯は、戦時中、日本陸軍の飛行場でした。戦後、米軍の通信基地として使われたのちに日本へ返還され、国立、県立の様々な施設が整備されました。柏Ⅱキャンパスは滑走路だったところの中程に位置します。柏の葉キャンパス駅からは千葉大学の敷地を通り抜けて徒歩約12分、駅近の優良物件です。

正門の隣には、インターナショナル・ロッジ 柏ロッジがあります。2009年に建てられた施設で、単身用や家族用など全142室があり、留学生や外国人研究者が入居できます。

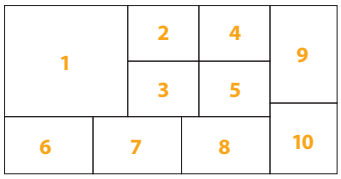
正門からキャンパスに入ると左手に新領域創成科学研究科の生涯スポーツ健康科学研究センターが使っていた建物が見えます。研究用のトレーニング施設がありました。2019年度で閉鎖されました。この辺りには、感染症研究施設の建設計画が進んでいます。

右手に並ぶ建物のうち、いちばん手前の建物は情報基盤センターと国立情報学研究所（NII）柏分館の合同棟です。2021年３月に竣工し、情報基盤センターが浅野キャンパスから引っ越してきて、NII柏分館とともに、データ駆動型社会に向けた新拠点として活動をはじめました。スパコン室には「計算・データ・学習」融合スーパーコンピュータシステムWisteria/BDEC-01や、データ活用社会創成プラットフォーム mdxなどが並びます。

次の建物は産学官民連携棟です。2019年３月に竣工し、地域科学実証拠点、インキュベーション施設として、学内外のさまざまな研究室、団体が連携して研究開発を進めています。南側のエリアは生産技術研究所 価値創造デザイン推進基盤の区画です。

一番奥には産業技術総合研究所（産総研）柏センターがあります。2018年11月に竣工しました。東大の構内に国立研究開発法人が拠点を持つ変わった仕組みですが、産学官一体で「人間拡張技術」を推進する拠点として整備されました。ここには、ビッグデータを用いた学習計算が世界最速レベルで可能なスパコンAI橋渡しクラウド(ABCI)があります。2021年６月の世界スパコンランキングでは、理化学研究所「富岳」の世界一に続き、ABCIが12位、Wisteria/BDEC-01のシミュレーションノード群（Odyssey）が13位に輝きました。日本の２位と３位が柏Ⅱキャンパスに集結しているわけです。

長いこと、ロッジとグラウンドくらいしかないと思われていたキャンパスですが、ここ数年で次々と大きな研究拠点が入り、賑やかになりました。目下の悩みは食堂も購買もないことです。インフラがさらに整うことを願っています。



1. 空からの眺め。手前に柏ロッジ、奥に情報基盤センターとNII柏分館、産学官民連携棟、産総研柏センターの建物が並ぶ。
2. 柏Ⅱキャンパス正門。右に柏ロッジ、奥に情報基盤センターとNII柏分館の合同棟が。
3. 正門前の道路。飛行場だった当時を彷彿させる広くまっすぐな道が続く。
4. 左が生涯スポーツ健康科学研究センターのあった建物。右手前は特高変電所の建物。
5. 情報基盤センターの「計算・データ・学習」融合スーパーコンピュータシステム Wisteria/BDEC-01。
6. データ活用社会創成プラットフォーム mdx。手前のストレージは大切なデータを保護するために免震構造となっている。
7. 産学官民連携棟の階段ホールは吹き抜けの素敵な空間。
8. 産学官民連携棟の入り口脇にはしなやかポリマーを利用したコンセプトカーItoPの展示が。
9. 産総研柏センターのスパコン AI橋渡しクラウド(ABCI)。
10. 産総研柏センターのサービスフィールドシミュレーター(SFS)は、人間の行動や生体情報を計測しモデル化するVR装置。

先端研の研究者がイグ・ノーベル賞を受賞

先端科学技術研究センターの西成活裕教授とクラウディオ・フェリシャーニ 特任准教授が、京都工芸繊維大学の村上久助教らとともにイグ・ノーベル賞の動力学賞を受賞しました。「歩行者が他の歩行者と衝突する理由」を行動実験から明らかにしたことが評価されたもの。受賞に際して西成先生は「あらゆる人々にとってスムースな移動が出来る社会に貢献していきたい」とコメントしました。

トロフィーを手にする両先生。

9/10

内山咲良選手が日本学生陸上競技対校選手権で優勝

天皇賜盃第90回日本学生陸上競技対校選手権大会の女子三段跳で陸上運動部の内山咲良選手（医学・６年）が見事優勝しました。記録は13.02m（追い風1.0m）。昨年5月の関東インカレ制覇に続く快挙で、大学陸上の日本一を決める本大会での優勝は本学学生として初めてでした。内山選手は「２年ぶりに自己ベストを出すことができ、また東京大学として初めて日本インカレで優勝できたことを本当に嬉しく思います」と喜びを語りました。

表彰式後に声援に応える内山選手。

9/17〜20

国際学術会議が白波瀬佐和子先生を副会長に選出

本学前理事・副学長の白波瀬佐和子先生（人文社会研究科教授）が、国際学術会議（ISC）の総会で選出され、財務担当副会長に任命されました。ISCは、国際科学会議（ICSU）と国際社会科学評議会（ISSC）が2018年に合併して設立された、自然科学と社会科学の両分野を統合する唯一の非営利国際組織です。各国の科学者を代表する140以上の組織と学術分野ごと40の科学・学術連合によって構成され、世界の自然科学と社会科学を推進するために活動しています。

文理を超えた展開を、と白波瀬先生。

10/14

脱炭素キャンペーン「Race to Zero」に本学が参加

東京大学は、2050年までにカーボンニュートラルを実現するために国連気候変動枠組条約事務局が開始したキャンペーン「Race to Zero」に参加しました。11月には脱炭素実現に至る日本のパスウェイを議論する産学連携プラットフォームETI-CGCが発足し、12月にはグローバル・コモンズ・スチュワードシップ指標2021版を発表。「UTokyo Compass」が掲げる目標に基づく取り組みが進んでいます。

ETI-CGC発足の発表イベントの様子。

10/21

10/21〜23

B&W部藏下選手が世界ベンチプレス選手権で3位に

リトアニアで行われたIPF世界ベンチプレス選手権大会で、ボディビル&ウェイトリフティング（B&W）部の藏下隼人選手が、フルギアジュニア部門105kg級でベンチプレス205kgという世界3位の記録を残しました。ジュニアは23歳以下、フルギアは肩のサポーターを装着した状態で行うことを示します。練習は週3日で授業期間以外は完全にオフというやり方で活動するB&W部。限られた機会と環境を最大限に生かしています。

表彰式に臨んだ藏下選手。

10/27〜31

漕艇部がボート競技全日本大学選手権で入賞

ボート競技の第48回全日本大学選手権において、漕艇部の主力艇「大志」がエイト（８人漕ぎ）で６位に入賞しました。エイト種目での入賞は2015年（７位）以来、国公立大学中トップでの入賞は2004年以来となります。今年度の漕艇部は「常識の更新」というスローガンの下、多くの面で新しい取り組みを続けてきました。「大志」は昨年漕艇部OBからいただいたご寄附で新しく導入された艇。艇の名に恥じない活躍でした。

奮戦する漕艇部エイトクルー。

11/30

クボタと組織対組織の産学協創協定を締結

東京大学と株式会社クボタは、共同研究と人材育成・人材交流を推進するため、組織対組織の産学協創協定を締結しました。期間は2021年12月から10年間。クボタは本協創事業に総額で約100億円を拠出する予定です。「100年後の地球にできること」をテーマに、「食料・水・環境」分野において両者の知見・技術・ネットワークを活用し、自然共生（ビオ）と循環型社会（ループ）を両立する「ビオループ」の創生をめざします。

記者発表で撮影に応じた両トップ。

1/28

ダイバーシティに関する意識と実態調査の報告書を公表

昨年12月〜今年１月に実施した「東京大学におけるダイバーシティに関する意識と実態調査」の報告書を公表しました。「UTokyo Compass」が掲げる誰もが来たくなるキャンパスづくりを進める際の基礎資料となるもので、全構成員の約４分の１（有効回答数11939）が回答しました。オンラインハラスメントの実態や性の多様性を探る項目も導入した調査結果はwww.u-tokyo.ac.jp/focus/ja/articles/z0517_00004.htmlからご覧ください。

概要版と詳細版の2種類があります。

東大校友会ニュース
March 2022 UTokyo Alumni Association News no. 42

SPECIAL INTERVIEW

未来を見つめ 新たな時代を切り開く

今回ご紹介するのは、
日本仏教の価値観を見なおし、未来世代とともに今を生きる長期的思考を提案する僧侶、
震災をきっかけに伝統ある造り酒屋を継いだ元テレビ局記者、日本のソウルフードであるラーメンを武器に、アメリカで奮闘するラーメンヒーロー。
3人の卒業生に登場いただき、今に至るまでの道、そして思い描いていることを伺いました。

松本紹圭

Shokei Matsumoto

かつて修行をした神谷町光明寺にて。

赤門繋がりで僧侶の道へ

気がつけば僧侶になって20年です。私のような寺をもたない僧侶は、かつて「遊行聖」とも呼ばれていました。母方の祖父が住職をしていて、寺の孫としてお坊さんは身近な存在でしたが、いつか年を取りお坊さんの道を探求するのもいいのかなという思いがあった程度でした。僧侶として修行することになったのは、少なからず赤門繋がりです。実家がお寺だというクラスメートが神谷町光明寺に下宿していて、時々彼の下宿先を訪ねるようになったことや、住職が東大出身だったこともあり、その縁で卒業後に光明寺に住み込み、修行を始めました。

経営を学びたかったため2010年にロータリー財団国際親善奨学生としてインドに渡りました。インド商科大学院はビジネスの第一線で経験を積んだ人が、世界中から集まっています。私はビジネスに親しんでこなかったからこそ、彼らと一緒に学び、この世界をどうとらえてどんな言葉で話しているのか、留学で得たものは大きかったと思います。

僧侶は先人たちの教えを翻訳すること

仏教で語られる言葉は、シャバ的言語と遊隔したところにあります。というのは僧侶の仕事は突き詰めて言えばブッダや親鸞といった先人たちの教えを現代に翻訳することで、案外簡単なことではありません。

昨年出版した『グッド・アンセスター　わたしたちは「よき祖先」になれるか』の翻訳も、まさに「アンセスター」を先祖と訳すか祖先と訳すかが重要でした。

そもそも日本仏教は先祖との関わりが深く、葬儀で念仏を称え、お盆やお彼岸には亡き家族を弔い、死者のためにひたすら供養をしてきました。「先祖」とは、血縁を表すのが一般的ですが、私たちの身の回りや暮らしを支える社会には、名も知らない無数の人たち、つまり「先祖」というより「祖先」が遺してくれたものに溢れています。血縁に閉じない「祖先」の言葉を受け取って今いかに生きるかが問われています。

Well-beingという発想

今、私は“産業医”ならぬ“産業僧”の取り組みを通じて、企業で働く人に向けて、僧侶としてできることを探求しています。企業組織体をひとつの生命体としてとらえ、集団としての「ウェルビーイング（Well-being/幸福感や充実感）」を整える試みです。

僧侶と社員による１対１の対話の音声データをAIで分析し、音声感情解析によるアルゴリズムの力を借りて、状態を捉えます。もちろん仏教の知恵から学ぶものはありますが、現代の文脈に翻訳する上で、サイエンスの関与は欠かせず、仏教×データサイエンスで企業を支援しています。

終身雇用や年功序列制度が壊れつつある中で、雇用をめぐる人々の不安は膨らんでいて、現状の所属先や、手にしている立場や肩書に縛られている人が少なくありません。この仕事、このチームに属しているメンバーから外れてしまったら、自分の人生は終わりだという意識に取りつかれると、それにしがみつこうという執着も生まれます。

特に社会的ポジションの高い人ほど苦しみに陥りやすいように感じます。人間は、こうあって欲しいという思いと、思い通りにはならない現実の格差を前にして、感情のバランスが崩れます。そこで産業僧は、他にも選択肢はたくさんあるよと執着から離れるヒントを与えます。

今日を生きる私たちにとってひとつ重要なことは、仏教はブッダになる教えであり、誰もがその道の上にあるということです。ブッダは目覚めた人という意味ですが、これは、執着から離れることを意味します。あらゆる執着から自由になることを成仏と言います。一切の執着をせず、完璧な状態が成仏ですが、人間ゆえ、そうはなれずに誰しもが苦しむのです。

大乗仏教は「一緒に救われていく思想」を大事にしています。いろんな人と協働しながら自由になるというウェルビーイングの発想のもと、これからもお坊さんは一緒に考えるパートナーでありたいと思っています。

Profile

2003年東京大学文学部哲学科卒。インド商科大学院でMBAを取得。寺をもたないひじり的僧侶としてnoteマガジン「方丈庵」を拠点に活動。ポッドキャスト「テンプルモーニングラジオ」の配信や、お寺の朝掃除の会「Temple Morning」など仏教界において新たな活動に注目が集まっている。

SPECIAL INTERVIEW

未来を見つめ 新たな時代を切り開く

4代目となって7年。「日本酒はふるさとの誇りです」

斎藤美幸

Miyuki Saito

造り酒屋の ひとり娘に生まれて

福島県の造り酒屋の一人娘として生まれ育った私ですが、両親を含め、親戚からは一度も「造り酒屋の後継ぎになれ」とは言われませんでした。そのため、逆に自分自身未来をどう考えていいのかわからず、正直将来の進路に迷いを感じていました。東大は入学して２年間教養学部で広く学んだのち３年の進学時に専門を決められると知り受験しました。

後継ぎになるつもりであれば農学部に進学して日本酒を学ぶなり、経済学部で経営や流通を勉強するなどいくつか選択する道はあったはずですが、リベラルアーツを深めたいと後期課程でも教養学部を選びました。メディアに興味があったのでテレビ局に入社します。２つのテレビ局で計16年ほど記者やディレクター等として勤務したのですが、３人の子供を海外で学ばせたくて夫の海外赴任に付き添う形でテレビ局を退職。帰国後はずっと専業主婦をしていました。

家業を事業にするために したこと

実家は1895年に創業し、今では福島市唯一の造り酒屋です。かつては宿場町として栄えていた地で旅籠を営んでいました。

「金水晶」という名前の由来ですか？　明治天皇が東北行幸で福島を訪れた際、近くの水晶沢からの湧き水を献上いたしました。お褒めにあずかり「金明水」と名付けられたそうです。私の曽祖父・初代金次郎が日本酒造りを始めた際は別の名前でしたが、お褒めにあずかった「水晶沢の金明水」で造った酒ということで「金水晶」と命名されたと伝えられています。

福島税務署管内に昭和30年代は７軒あった造り酒屋は、次々に暖簾を下ろし、今では私ども1軒だけになりました。父が高齢となり、東日本大震災も起きたため蔵を閉じる方向で家族と話をしていたのですが、父の思いは違ったようです。金水晶を愛してくださる地元の人、人が集まる場所にはいつも金水晶の酒があり、慣れ親しんだ銘柄はいつまでも皆さんの記憶に生きている、できれば続けたい。「こんな時こそ頑張らなければいけない」と。

私自身葛藤しましたが、「やはり福島の酒をなくしてはいけない」と強い思いが沸き、金水晶を継ぐ決心をしました。夫からは「いつか蔵を継ぐ日がくると思っていた」と言われましたね。

2019G20大阪サミットに提供された自慢の大吟醸。全国新酒鑑評会金賞14回。ロゴの▲と●は漢字の金水晶を表す。

2015年４月単身福島に戻って、金水晶４代目を継ぎましたが、まさに一からのスタートでした。最初は父の仕事ぶりを見習っていたのですが、自分流でやってきた父の方法ゆえ、経営戦略はないに等しくなかなかうまくはいきません。私自身経営は素人でしたが、伝える仕事をしてきた報道記者の経験から、広報ならできると気づきました。皆さんにおいしいお酒だとわかってもらうために、ラベルデザイン、パッケージを斬新に一新。SNSでも積極的に情報発信を始め、古い造り酒屋の良さが伝わるよう変えていきました。

伝統を守りながら 次世代に引き継ぐ

社長を継いでからは新しいネットワークにも恵まれ、「東大蔵元会」のメンバーになりました。社長が東大卒業生の蔵元や、東大に縁のある蔵元が10銘柄以上集まり、ホームカミングデイで利き酒会を主催しています。コロナのためこの２年開催はできていませんが、大きな蔵元の皆さんと話せる貴重な機会であり、それぞれの酒造りの思い、日本酒への愛情などさまざまなお考えを直接伺えました。ものづくりに励む姿は、同じ酒造りをする人間として勇気づけられ、新たな道での同窓生の繋がりに感謝しております。

いつか他大学の蔵元と「美酒早慶戦」※のような飲み比べイベントを開催しても楽しいだろうなと思っています。金水晶酒造店はこの14年間全国新酒鑑評会で連続入賞しています。近年は求人をしなくても若い蔵人希望者が集まるようになりました。長男はまだ５代目の修行中ですが、経営を学ぶため銀行を退職し、大学院で経済学に取り組んできます。

心強いと思う反面、親としては不安ですが、父もまだまだ元気なので、福島市に唯一残った造り酒屋を誇りに、親子三代で福島を盛り立てていきます。

金水晶の酒造りのこだわりは、地元福島へのこだわり。これからも酒で福島の良さが伝わるよう、皆さんにおいしい日本酒をお届けしたいと思います。

※早稲田大学と慶応義塾大学両校出身の蔵元が自慢の酒を出品し、参加者が利き酒をするチャリティー。

Profile

1988年東京大学教養学部卒。フジテレビに入社し記者生活を送った後、福島テレビに転職しドキュメンタリー制作でギャラクシー賞優秀賞受賞。夫の海外赴任に伴い退職し、小５、小２、１歳半の子供とともに渡米。１年後に帰国し専業主婦となる。2015年、高齢の父の後継者として地元福島に戻り４代目蔵元となる。2018年より金水晶酒造店代表取締役。

長谷川浩之

Hiroyuki Hasegawa

ラーメン愛が高じてビジネスに

大学３年の時には就職活動をし、内定もいただいたのですが、なんとなくしっくりこない、どこかで自分に嘘をついていたという感じ。もやもやした思いを抱え、結局進路に迷って１年留年しました。インターンシップをしてみたり、情報系の有志が立ち上げたスタートアップゼミに出入りしたりとか。以前からアントレプレナー精神はあって、漠然と起業をしたいと考えていたのが学生時代の僕です。

卒業後、仲間とスタートアップを創業したこともありましたが、１年ほどで閉じました。会社を離れて失うものはゼロであり、手元にある通帳の残額を使い切ろうと。であればAppleやGoogleが生まれた憧れの地でチャレンジしてみようと考え、20万円ほどのお金を手にサンフランシスコに渡りました。

学生時代は週５日以上ラーメン屋開拓をするほどのラーメン好きでしたが、米国ではラーメン市場が盛り上がっている反面、クオリティの高い店が少なく、数少ない良い店は大行列。１～２時間待つのは普通で、美味しいラーメンにアクセスしづらかった。日本とは大きなギャップの実情を見て、これは大きなチャンスだと。東京でふだん食べられるような味で、このアメリカで勝負したいと、アイデアを思いついたわけです。ただラーメン作りは素人だったので、香川県にあるラーメン専門学校でまずはラーメン作りの最低限の基本を学びました。

僕はアメリカでラーメンヒーローになった

そこで学んだことを再現すべく再びアメリカへ。米国市場ではとんこつ系のラーメンを提供するラーメン店が進出していたため、自然ととんこつラーメンが人気となりました。自分としては、より幅広い種類のラーメンを広めたいと思い、時には試食会を開催してアドバイスをもらい、現地の人の反応をみながらマーケットリサーチをしていました。そのうちにたどり着いたのが、ソリューションとして、高品質、かつ手軽に調理できるラーメンをEC販売することでした。誰もが簡単に日本の味を楽しめ、自分たちが美味しいと思うラーメンを安定した味で売るのが課題だったので、まずKickstarterで資金調達のためのプロジェクトを立ち上げます。おかげさまで目標金額を達成することができ、本格的に事業を立ち上げました。

現在「Ramen Hero」で売っているのは味噌、しお、しょうゆ、とんこつ、スパイス、ベジタリアン向けなど１食15～17ドル程度。ラーメンに特化したミールキットは、冷凍で届けられます。麺をゆで、スープを温めトッピングを乗せるだけで、誰もが簡単に作れるのが魅力。やはりとんこつ味は人気ですね。クリーミーでかつパンチがきいているので、アメリカの方は皆さん好まれます。

さほどお金もなかった僕がなぜ渡米する気持ちになったのか。人に喜ばれるものを作りたいという思いは常にあったわけですが、それを叶えるためのものと失いうるものと計りをかけたら、叶えるための野心が上回っていました。フェーズが進むにつれて、成し遂げたことも増えましたが、失うものも増えます。自分の中で“得られるもの”を大きくアップデートすることが大事ですし、それが夢を見続けられる僕の強みでもあるのかなって思います。

日本の食文化、食卓シーンを世界に届けたい

アメリカは家族や誰かと一緒に外食をする文化があります。日本でラーメンといえば、ランチや仕事帰りにひとりでふらりと立ち寄って食べるもので、そこが市場開拓のネックでした。ただコロナの影響で家族が自宅で食事を楽しむことが当たり前となり、さらにデリバリーも追い風となったことで、今は顧客数も順調に伸びています。「家族みんなで作って食べています」なんてメッセージをもらうと、本当に嬉しい。

そうはいってもまだまだ新しい食文化で、“Ramen”という言葉を聞いた時にインスタントラーメン(乾麺)を連想する人も多いですね。おそらく、世界の多くの国でも同じ状況だと思います。ラーメンの奥深い、進化し続ける食文化を伝えていきたいと思いますし、今後もハイクオリティな日本のソウルフードであるラーメンを多くの人に届けたい。ラーメンに必要なうまみのトピック、その他ラーメン鉢、レンゲなど、さまざまなラーメン関連のコンテンツにも着手し、日本の食卓シーンを楽しんでもらいたいと思っています。

着実にファンの増えてきている完全植物性のビーガン醤油ラーメン。

「妥協せず、とことん味を追求するスタッフに恵まれています」と長谷川さん。

Profile

2013年東京大学経済学部卒。Ramen Hero Founder & CEO。山梨県出身。大学卒業後、フード系スタートアップに創業メンバーとして参画。2017年、米国サンフランシスコにてRamen Heroを立ち上げる。2018年12月～2019年３月、米国シードアクセラレーターAngelPadに参加。現在ではアメリカ全土48州に展開中。

対談

校友会会則改正の狙い

東京大学校友会は昨年7月に会則を改正し、会費規定を新設しました。この背景や狙いについて、藤吉泰晴東大校友会副会長と神澤俊介事務局長に語っていただきました。

校友会のさらなる基盤強化に向けて。

神澤事務局長(以下神澤)　校友会の会則が大幅に改正されました。

藤吉幹事長(以下藤吉)　一昨年（2020年）夏に校友会幹事会の下に会則改正ワーキンググループを設置し、全学同窓組織としての自立、ガバナンス向上に向けた会則の改正案を毎月の会合で討議検討しました。その結果、校友会の目的及び事業に「大学への支援」を明記し、役員会及び代議員会に加えて幹事会も会議として権限を明確化し、さらに、会費規定を新設する等の改正案が策定され、幹事会、役員会の承認を経て昨年７月２日に施行されました。実際の会則には、「東京大学の発展をグローバルに支援することを目的とする。」と記載しました。「卒業後は、なぜか群れない東大生」から「群れて世界と競争しよう」との意識を込めさせていただきました。校友会は2004年、大学の独立法人化に伴って卒業生ネットワークの強化のために大学主導で発足した経緯もあり、長年、必要経費約４千万円を大学拠出金や寄附金等に依存してきましたが、今後は各団体会員及び各個人会員から１万円の会費を納入いただき、組織的にも財政的にも自立して行くことになります。

神澤　校友会の主要な活動としては、会報「東大校友会ニュース」の発行やホームカミングデイの開催（大学との共催）に加え、近年は入学生、就活生等、在学生向けのプログラムに注力し、「大学への支援」を会則改正に先行して展開してきました。

藤吉　大学の独立法人化当時は、「支援イコール寄附」と捉えて反発・警戒する向きもあったため、「大学への支援」を会則に明記することが憚られたようです。しかし、その後10年余り、卒業生ネットワークの強化が進み、校友会の活動も拡大するのと並行して、本学卒業生／修了生の意識も変化し、東大校友会支援基金への寄附が増える一方、2017年度より募集を始めた大学支援ボランティア（「校友会サポーター」）にも多数の卒業生が登録しています。私自身、卒業以来、大学とは無縁な生活でしたが、2017年春に第１期の校友会サポーターとなり、就活面接演習講座の面接官役を務めたりしているうちに、校友会幹事長をお引き受けするに至りました。今や、大学や在学生のために貢献したいがどう大学にアプローチしたらよいか分からないという卒業生／修了生は非常に多く、校友会の目的や事業に「大学への支援」を明記すべきだという考えを強く持ちました。

神澤　校友会の目的には、当初から「会員の相互親睦・協力」が謳われていますが、これに「大学への支援」が加わったところで、会費の規定が新設されたわけですね。

藤吉　全学同窓組織として、「会員の親睦」と「大学への支援」とが二大目的であり、今後の会費収入は、ホームカミングデイを始めとする会員親睦の活動にも使われますが、校友会の必要経費を賄って大学依存を軽減することはそれ自体が大学への支援に他なりません。会費収入が増えれば増えるほど、大学の拠出金が減ると共に、在学生向けのプログラムも拡充され、さらには、卒業生ネットワーク強化のために大学が開発・提供していくシステムやサービスへの経済的支援も可能になります。従って、300団体を超

組織的、財政的にも自立していくための一歩です

神澤俊介
東京大学校友会事務局長
かんざわ しゅんすけ／1978年東京大学法学部卒。住友銀行、AIGなどの金融業界を経て独立。2012年より東大校友会事務局長、卒業生部門ディレクターを兼務。全日本ベテランテニスの常連でもある。

える団体会員、存命卒業生／修了生約20万人、在学生・教職員約４万名から成る個人会員の皆様が広く会費を納入して下されば、大学への大きな支援に直結します。１回きり１万円という会費は、全学同窓組織の会費としては異例に割安ですので、出来るだけ多くの会員の皆様が早期に会費を納入して下さることを期待しています。

神澤　会費納入のために多様な決済手段を用意しています。団体会員には、銀行振込やクレジットカード決済で納入頂くよう依頼していますが、個人会員である卒業生／修了生、在学生、教職員については、クレジットカード決済、コンビニ決済の両方が出来るように致し、本号会報の郵送先にはゆうちょ銀行の払込用紙も同封しています。会員の方々には、卒業年・学部等の必要最小限の情報をご入力（記載）いただいた上で会費をご納入願えれば幸甚に存じます。

藤吉　校友会幹事会では現在、代議員会の機能を強化するため2022年度会則改正案を討議中です。現在の代議員会は、団体会員から選出された代議員のみで構成され、議決権限もありませんが、これに個人会員から選出された代議員も加えた上で、役員会に集中している議決権限の一部（例えば、会則改正）を代議員会に移す方向です。そして、個人会員から代議員を選出する際には、代議員就任の資格や代議員を選挙する投票権を会費納入済みの個人会員に限定する、という案が有力化している点も申し添えます。また、会費を納入下さった会員に対しては今後、限定的、優先的なサービスやイベントを順次導入して行く所存です。

「大学支援」「会員の親睦」が校友会の二大目的。大学依存の軽減こそが大学支援に他なりません

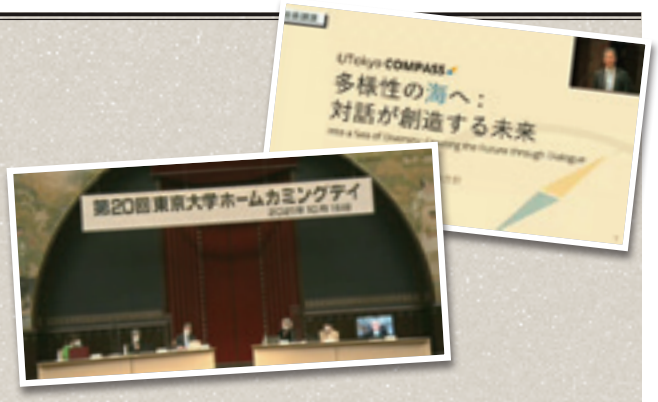
藤吉泰晴
東京大学校友会副会長兼幹事長
ふじよし やすはる／1981年東京大学法学部卒。三井物産で食糧食品分野に従事し、その後三井食品代表取締役社長、在任中に、第一期東大校友会サポーターに登録。学生向け模擬面接、キャリア相談など、幅広い就活支援を行った。

東京大学校友会
個人会員（卒業生／修了生）会費納入決済フォーム

https://paysys.jp/forms?form_code=3564561438583334

お問い合わせ：東京大学校友会事務局
E-mail:utaa.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp

東京大学ホームカミングデイ 2021のご報告&2022のお知らせ



2021年10月16日(土)
第20回東京大学ホームカミングデイのイベントは
ライブ配信とオンライン配信（オンデマンド）で開催しました。

安田講堂で行われた特別フォーラム・午前の部では、冒頭、藤井総長が、今後６年間の基本方針である「UTokyo Compass」について説明しました。その後、総長と藤垣裕子、林香里、石井菜穂子、岩村水樹等４人の理事に加え、ニューヨークオフィスから大栗博司カブリ機構長がオンラインで参加。岩村理事がモデレーターとなり、東大が目指すべき姿について一同で語り合いました。
報告の詳細はウェブサイトをご覧ください。

HOME COMING DAY
The University of Tokyo

詳細はこちらから

＊2022年のホームカミングデイは10月15日(土)に開催予定です。詳細が決まり次第ウェブサイトでご案内いたします。

教養学部の小さな娘「森オルガン」

900番教室の２階部分にあるパイプオルガンは、もともとは吉祥寺の教会にありました。火事のために廃棄寸前であることを知った教員たちが受け入れを思い立ちましたが、大幅な修理が必要で資金が足りません。そこで教養学部の新田義之先生（現・本学名誉教授）が親交のあった森稔氏に相談。御尊父で当時の森ビル社長の泰吉郎氏が支援を快諾され、オルガン制作者・望月広幸氏のご尽力を得て1977年に設置されたのでした。駒場寮時代に遡る２人の友情に基づく説得と音楽好きの泰吉郎氏のご理解が、芸大以外の国立大学では珍しい企画を実現させたのです。小ぶりのオルガンですが、トレムラント装置やカップラー装置を備え、多彩な音色を響かせます。楽器の女王とも称されるオルガン。教養学部オルガン委員会は、「我々の小さな娘」であるこのオルガンを慈しみ、定期演奏会などで活用しています。
https://organ.c.u-tokyo.ac.jp/index.html

淡青 tansei The University of Tokyo Magazine 44 2022/03 東京大学広報誌

発行日／令和４年３月14日　編集発行／東京大学広報室　東京大学本部広報課　〒113-8654　東京都文京区本郷７丁目３番１号
TEL 03-3811-3393 E-mail：kouhoukikaku.adm@gs.mail.u-tokyo.ac.jp　URL：https://www.u-tokyo.ac.jp

VEGETABLE OIL INK

志ある卓越。 東京大学 THE UNIVERSITY OF TOKYO